

伊祖いりの入れ御拝領墓

—— マンション建設に伴う近世墓の発掘調査 ——

1996年3月

沖縄県浦添市教育委員会



伊祖の入れ御拝領墓全景



「浦添按司御乳母吳勢」の銘入り厨子甕

序

「伊祖の入れ御拝領墓」の発掘調査は、浦添市字伊祖のマンション建設に伴う緊急発掘調査として実施したものです。

この墓は無縁墓でしたが、厨子甕^{ミガチ}の銘書によって、1822年頃に浦添御殿^{ウドゥン}から入れ^{いり}（費用）を拝領して築造された近世農民の墓であることが明らかになったことから「伊祖の入れ御拝領墓」と名付けました。

調査は発掘調査を主体に実施しましたが、他に歴史学、民俗学、人類学など、関連する諸分野の先生方にも参加していただきました。こうした総合的調査・分析によって、墓の構造や築造法のほか、近世琉球人の形質や当時の葬制などの一端が明らかになり、銘書からはこの墓に眠る人々の親族関係の復元も可能になりました。

今回の調査によって近世浦添の農民家族像を垣間見るができるようになりましたが、今後は、この調査の成果を広く市民に公開し、活用を図っていきたいと思います。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり数々の指導・助言を賜りました諸先生方に対し厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

教育長 福 山 朝 秀

例 言

- 1 本報告書は浦添市字伊祖614-1番地に所在した「伊祖の入れ御拝領墓」の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査は立山住研株式会社によるマンション建設に伴うもので、浦添市教育委員会が同社から依頼を受けて実施した。
- 3 本報告書に掲載した「字伊祖と入れ御拝領墓の位置図」は浦添市役所発行の25,000分の1図を使用し、「伊祖の入れ御拝領墓と周辺の文化財位置図」は国土地理院発行の2,500分の1図を使用した。
- 4 伊祖の御拝領墓所在地の地形測量は(株)与那嶺測量設計に委託した。
- 5 墓の各部名称のうち、墓口、香炉、汁ヒラシ、棚、一番棚、二番棚、三番棚、左右棚、袖石垣などの名称については『擇日墓造安葬年月日時』、『風水書』など近世文書の用語を使用した。
- 6 出土した厨子甕の中で、マンガン掛け厨子甕や御殿型厨子甕正面の銘書枠囲いの名称については、那覇市壺屋での呼称「屋門^{ヤージョウ}」を使用した。
- 7 本報告書の執筆は下記のメンバーで担当し、編集は宮里が行った。
下地安広 第I章
宮里信勇 第II章／第III章／第IV章第1節1／2(3)～(5)
當銘由嗣 第IV章第1節2(1)・(2)
土肥直美 第IV章第2節
玉木順彦 第IV章第3節
田名真之 第IV章第4節
安里 進 第V章
- 8 発掘調査および本報告書作成にあたっては次の方々から指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。土肥直美、田名真之、玉木順彦の各氏には原稿も執筆していただいた。重ねて感謝申し上げる次第である。
土肥直美(琉球大学医学部)、田名真之(那覇市文化局歴史資料室)、玉木順彦(北谷町公文書館)、仲田栄二(本市文化財調査審議委員)、島 弘(那覇市教育委員会文化課)、島袋春美(沖縄県教育委員会)、長間安彦・徳元 剛・小野まさ子(以上、浦添市立図書館沖縄学研究室)、小橋川秀義(壺屋陶器事業協同組合)、高江洲康義(沖縄陶器株式会社)。以上敬称略。
- 9 出土した資料については浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	い そ の い り め ご は い り ょ う ば か							
書 名	伊祖の入め御拝領墓							
副 書 名	マンション建設に伴う近世墓の発掘調査							
巻 次								
シ リ ー ズ	浦添市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編 著 者 名	安里 進・下地安広・宮里信勇・當銘由嗣・土肥直美・玉木順彦・田名真之							
編 集 機 関	沖縄県浦添市教育委員会文化課							
所 在 地	〒901-21 沖縄県浦添市宮城 2 丁目 4 番 1 号 ☎ 098-877-4556							
発行年月日	西暦1996年 3 月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
い そ 伊祖の い り め ご は い り ょ う ば か 入め御拝領墓	おきなわけん 沖縄県 うらそえ し あざ い そ 浦添市字伊祖	47208		26° 15' 7"	127° 43' 45"	1994.6.28 } 1994.8. 8	130㎡	マンション建設
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代		主な遺構		主 な 遺 物		特記事項
伊祖の入め御拝領墓	古 墓	近 世 近 代		平 葺 墓		陶磁器 ・ 蔵骨器 ・ 花瓶 ・ 碗 ・ 小杯 人骨 銭貨 鉄釘 針 石斧 シャコガイ ブタ下顎骨 サング片 海産貝		

目 次

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第Ⅲ章 調査の経過	5
第Ⅳ章 調査の成果	6
第1節 発掘調査成果	6
1. 墓の構造	6
2. 出土遺物	12
(1) 蔵骨器	13
(2) 蔵骨器内の検出遺物	17
(3) 墓室内出土遺物	17
(4) 墓庭出土遺物	17
(5) その他	18
第2節 伊祖の入め御拝領墓出土の人骨	20
第3節 民俗学からみた伊祖の入め御拝領墓	31
第4節 浦添家について	33
第Ⅴ章 まとめ	38
写真図版	41

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

浦添市字伊祖^{まぐばる}真久原613番地ほかでマンション建設計画を立山住研株式会社が立てた。この一帯は近年まで真久原遺跡や古い岩陰墓などが隣接していたため、市文化課では埋蔵文化財の調整地域としていた。

そこで、宅地造成の前に現地踏査を実施したところ、近世墓1基の所在と墓中の厨子甕が21基確認された。また、発見された厨子甕^{ミガチ}の一つの銘書（墨書）には「基（墓）之儀者浦添御殿従入め御拝領」と記されていた。いわゆる御拝領墓であることが明確であり、貴重な文化財と判断された。そのため、墓の現地保存について幾度かの調整・協議を立山住研株式会社と行った。結局、同墓は発掘調査後にマンション建設を行うことになったが、その文化財的重要性に鑑み、とくに「伊祖の入め御拝領墓」と名付けることにした。

発掘調査は、立山住研株式会社から市教育委員会が委託を受けて平成6年6月28日から同年8月8日までの期間で実施した。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 体 浦添市教育委員会

教 育 長 保久村昌伸（平成6年度）

〃 福山 朝秀（平成7年度）

教 育 部 長 西原廣美

文化課主幹 安里 進

文化財係長 下地安広、文化財担当技査 仲西盛雄

事 務 担 当 文化課主事 宮里信勇・小那覇典江

調 査 指 揮 文化課主幹 安里 進

調 査 指 導 土肥直美（琉球大学医学部助教授）、田名真之（那覇市歴史資料室主幹）、
玉木順彦（北谷町公文書館主事）

調 査 担 当 宮里信勇（文化課主事）

調査補助員 當銘由嗣（文化課臨時職員）

調 査 協 力 比嘉ひとみ（名護博物館学芸員）、長間安彦（浦添市立図書館嘱託）

小野まさ子（現具志川高校教諭）、徳元 剛（浦添市立図書館嘱託）

栗国恭子（浦添市立図書館嘱託）、松川 章（浦添市文化課主事）

仲間淳一（南風原町史編集室嘱託）

作 業 員 浦添市シルバー人材センターより。

現 場 図 面 琉球大学史学科学生の城間宣子、柳田晴子、下坂奈留美の協力があつた。

第Ⅱ章 位置と環境

伊祖の入め御拝領墓が所在する字伊祖は、市のほぼ中央部に位置する。そこから南東方向に所在する浦添グスクからつづく丘陵が、伊祖の字域を東西に分断するように走り、これを高所として西側には低地が広がっている。昭和10年代の土地利用図によると、この丘陵に立地する伊祖グスクの西側に隣接して小さな集落が展開し、他は大部分が畑や水田に利用されていた(註1)。近年では土地区画整理事業などにより全域にわたり宅地化が進行している。

伊祖は古くは『おもろさうし』に「ゑそ」と謡われ、近世17世紀の『琉球国高究帳』・『絵図郷村帳』には「ゑそ村」、18世紀の『琉球国由来記』には「伊祖村」と記されている。『球陽』には伊祖村の村落移動に関する記載がある。これによると、伊祖村は集落が非常に狭く、しかも傾斜地に立地し、風雨の際には宅地間の往来にも不便であった。そこで乾隆5年(1740)に王府に上申し集落を東方へ移動した。しかし、移動後は病気が多くなり、人口も増えず、土地もやせ地となったため、再び上申し、1787年に許可され、元の場所へ戻ったという(註2)。伝承による伊祖の古島跡(字伊祖真久原所在)は乾隆5年の移動地と考えられている(註3)。

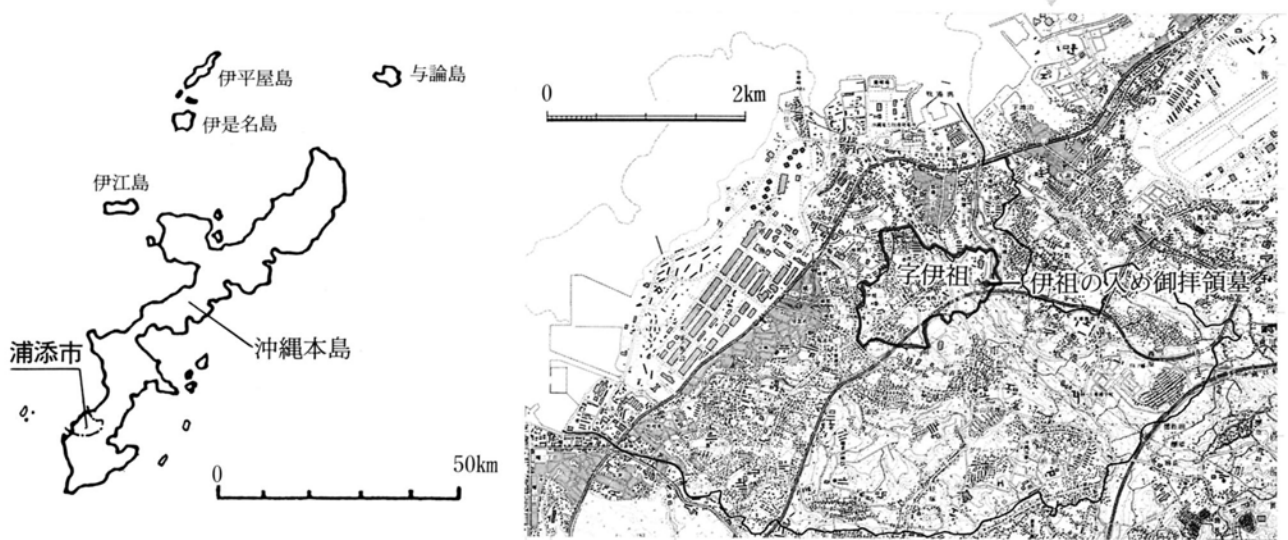
さて、伊祖の入め御拝領墓は伊祖の古島の東側に位置する小丘陵上に築かれていた(字伊祖真久原614番地)。同丘陵は、琉球石灰岩を基盤(標高50~60m)とし、東方崖下には牧港川が西海岸に向け流れ、急峻な谷間を形成している。字伊祖出身者からの聞き取りによると、一帯をマーヒバンタ(急崖の意)と称していたようである(註4)。谷間を挟んで対岸の丘陵には宜野湾市嘉数集落の墓域とされるチヂフチャー古墓群が所在していたが、宅地造成により大部分が姿を消した(註5)。

昭和59年、県道153号線の工事計画に伴い、県文化課により本丘陵の古墓群調査が実施された(註6)。工事計画範囲内には風葬墓20基、破風墓1基、石灰岩の岩陰や半洞穴に野面積みの墓口のもの7基が確認され、時期的には近世~近代に限られているようだ、と報告されている。同報告の古墓分布図には、今回の伊祖の入め御拝領墓は記されていないが、古墓の分布状況からすると真久原古墓群の中の一つとして含めてよいだろう。県文化課の調査や聞き取り調査、今回の入め御拝領墓の厨子甕銘書からすると、真久原の丘陵一帯は近世以降の字伊祖の墓域であったことが窺い知れる。

伊祖の入め御拝領墓の周辺には伊祖の古島跡、伊祖グスク、伊祖の高御墓、浦添貝塚、チヂフチャー洞穴遺跡、伊祖のガンヤー、シーサー山(ヒーゲーシ)などの文化財が所在している。伊祖の入め御拝領墓の北側丘陵上には真久原遺跡があったが、先の県道153号線工事に伴い古墓群とともに失われ、その一部を残すのみとなっている。

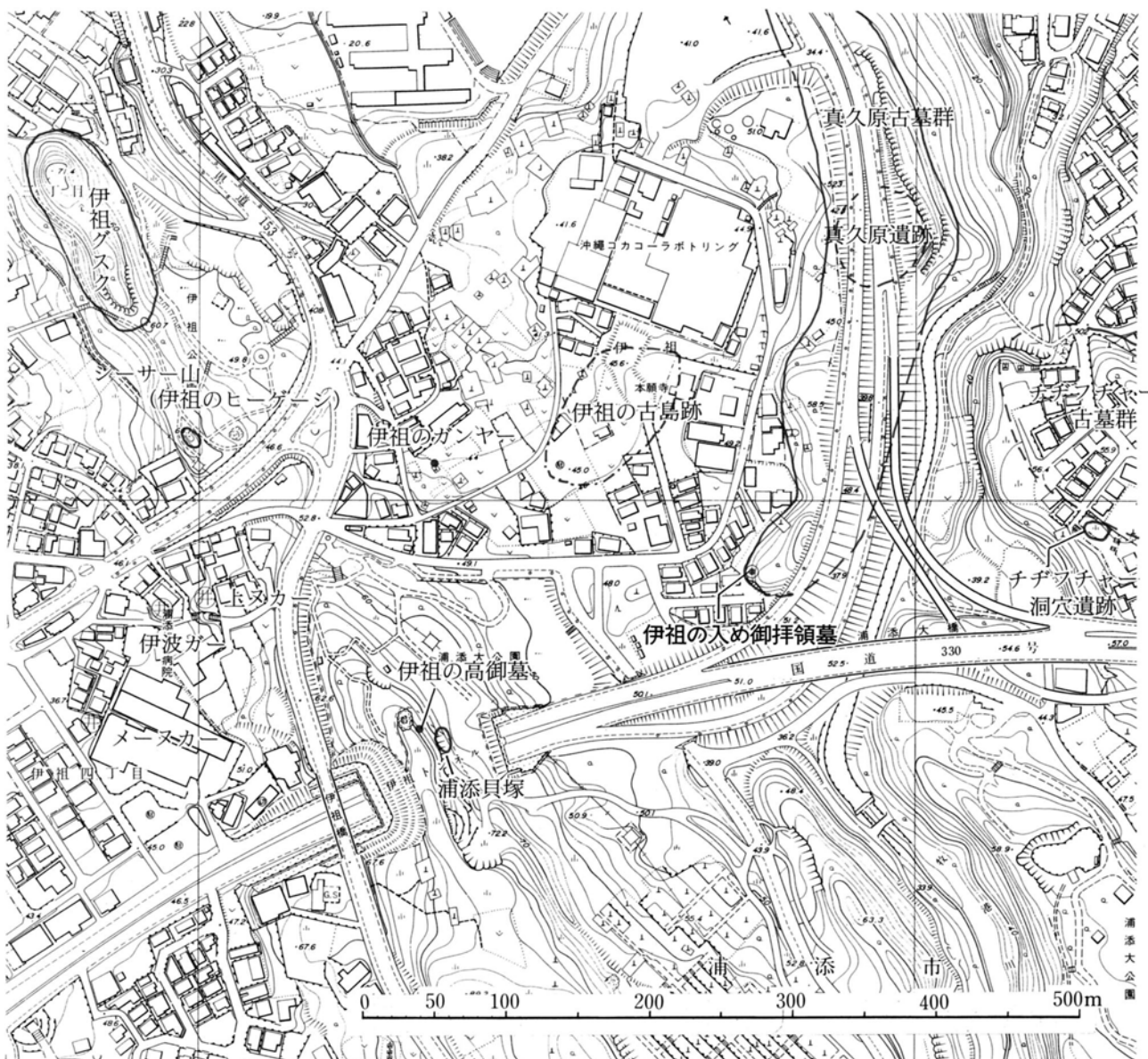
(註)

- 1.『浦添市史』第6巻資料編5 自然・考古・産業・歌謡(浦添市史編集委員会、1986年3月)
- 2.『浦添市史』第2巻資料編1 浦添の文献資料(浦添市史編集委員会、1981年3月)
- 3.『うらそえの文化財-民俗文化財分布調査-』(浦添市教育委員会、1983年3月)
- 4.『浦添の地名』(浦添市教育委員会、1988年3月)
- 5.『チヂフチャー古墓群』(浦添市教育委員会、1985年3月)
- 6.『牧港貝塚・真久原遺跡』(沖縄県教育委員会、1985年3月)

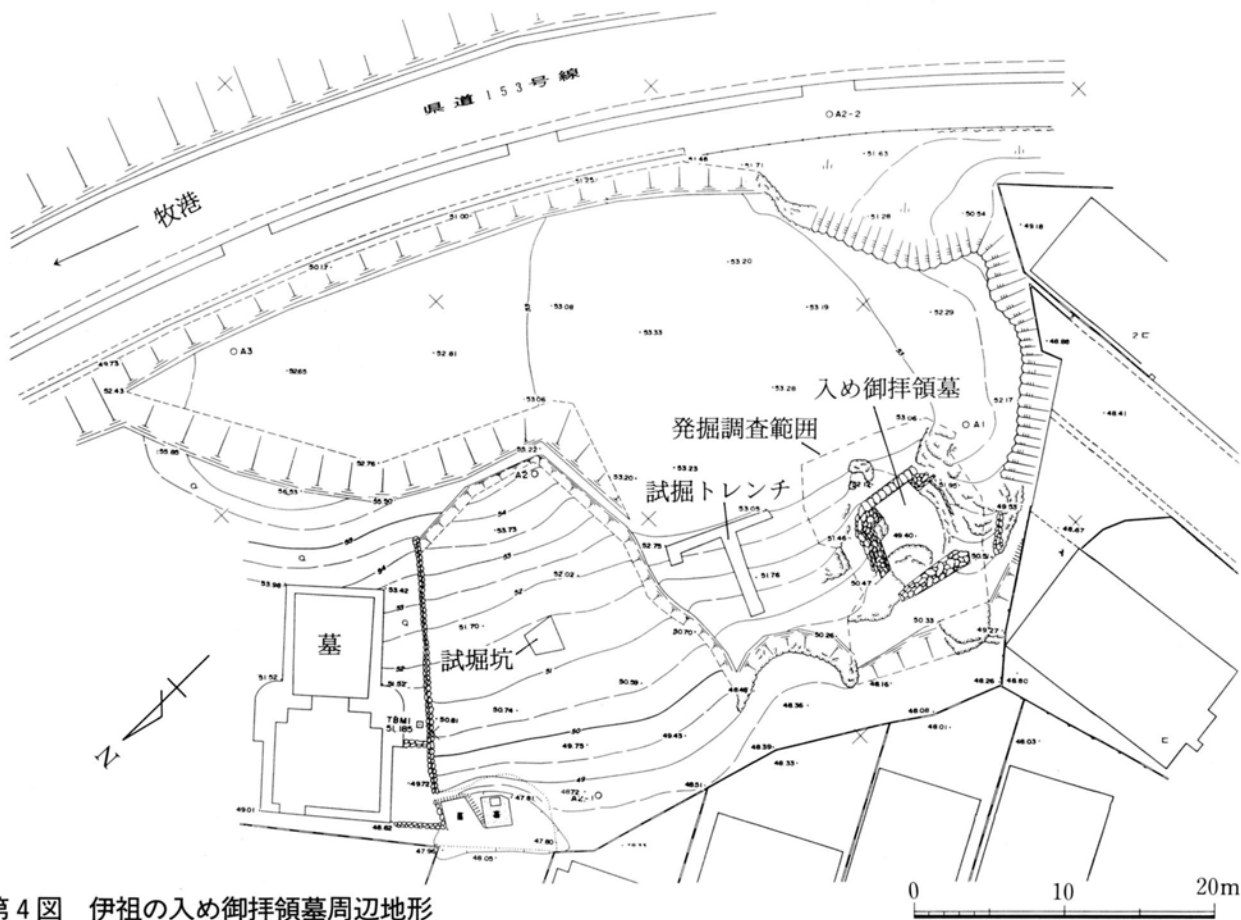


第1図 浦添市の位置

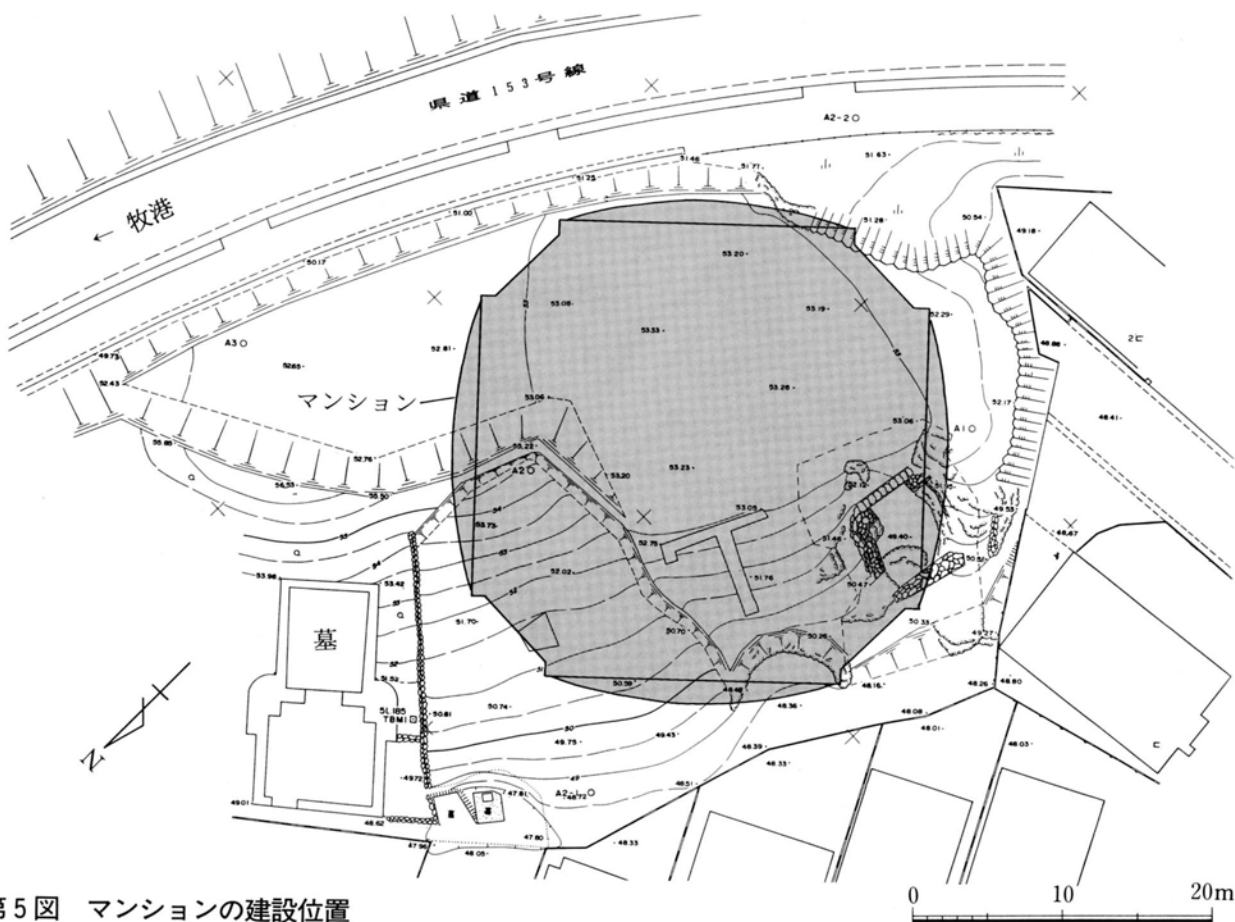
第2図 字伊祖と伊祖の入れ御拝領墓



第3図 伊祖の入れ御拝領墓と周辺の文化財



第4図 伊祖の入れ御拝領墓周辺地形



第5図 マニションの建設位置

第三章 調査の経過

発掘調査は平成6年6月28日から同年8月8日までの約1ヶ月半の期間で実施した。樹木の伐開については、調査開始前（6月6日～17日）に文化課職員立会いのもと、調査依頼者の(株)立山住研が実施した。

伐開着手前の墓は、タブノキの大木やヤブニッケイ、ハゼノキなどの中～高木に完全に覆われ、また墓庭には低草木が茂っていたため、外側から本体を確認するのは困難であった。墓に隣接する北側斜面は近年まで畑地として利用されていたようで、下草が生えている程度であったが、墓の上方（東側）の丘陵上にはススキが繁茂していた。

伐開作業はまず、墓の周囲から手掛け、それから墓庭、丘陵上の順に進めた。墓庭に生育していたタブノキについては、年輪鑑定を依頼するため地表から120cmの部位を輪切りにし、搬出した（年輪鑑定の結果、樹齢43年と判明）。

発掘調査は6月28日から開始した。調査はまず、墓庭や周辺の清掃作業から始めた。中高木や低草木類の伐採は事前に済ませていたものの、樹木の切株や石垣に張り付いた樹根を除去するのに多くの時間を費やした。

墓庭の発掘は南東区、北東区、北西区、南西区に4分割して行った。分割は墓口の中軸線を主軸線とし、墓口から3mの地点で主軸に直交する横軸線を設けた。墓室内は墓庭の主軸線を延長し、墓口から1.5m地点の^{シル}汁ヒラシで横軸線を設定した。

墓庭は周囲から流れ込んだ土砂と、墓の屋根から転落した切石の除去から進め、次に表土層を発掘し、墓造成時の整地層上面の露出作業を行った。全体に整地層面を露出させたのち、墓庭の造成状況を調べるため基準軸線に沿って、30cm幅のトレンチを設けた。

墓庭の西側石積みの裏に円形状の落込み部分があり、以前の墓出入口と考えられたため、石積みの実測図を作成したあと発掘したが、出入口と判断できる遺構は出土しなかった。

墓室内は蔵骨器や天井からの落石により、足元が狭く、身動きが困難な状態にあった。調査は先に汁ヒラシ部分の実測を済ませ、次に蔵骨器の搬出作業を行った。搬出には形質人類学、歴史学の各先生方にも参加していただき指導を仰いだ。作業は蔵骨器に任意に付した番号の順に1基ずつ墓庭へ出し、人骨を取り出して骨を部位ごとに分類し梱包した。また、これに並行し、^{ミガチ}銘書の判読も行った。搬出した蔵骨器は市文化課へ、また、人骨は分析のため琉球大医学部へそれぞれ搬入した。こうして蔵骨器の搬出作業を終えたあと墓室内の発掘に取りかかった。先述のように墓室内には天井から崩落した石灰岩や、石粉が堆積していたため、その除去から始め、^{グナ}柵および汁ヒラシを完全露出したのち、墓庭と同様、造成土の発掘を行った。

以上のように調査を進めたが、一方では(株)与那嶺測量によって周辺の地形測量も実施された。また、近くには真久原遺跡（グスク時代）が所在したため、墓の北側斜面2ヶ所で試掘を行ったが、関連する遺構・遺物は発見できなかった。

調査後、墓に使用された切石を保存するため、慎重に解体し、運搬を終えて調査を完了した。

第IV章 調査の成果

今回の調査は発掘調査から資料分析まで、考古学、歴史学、民俗学、形質人類学の分野によって総合的に進められた。以下はその成果である。

第1節 発掘調査成果

1. 墓の構造

伊祖の入め御拝領墓は琉球石灰岩を基盤とする小丘の西斜面に築かれた平葺墓である。

墓は石灰岩の岩盤をほりくぼめて墓庭を造り、そこから岩盤に横穴を掘削して墓室にしている。墓口は地形の傾斜方向と同じで、ほぼ西向きに開口しているが、墓庭への出入口はほぼ磁北へ開いている。墓庭の面積は約22㎡で、上面観は平行四辺形に近い形状を呈している。

この墓は、墓庭の大部分が岩盤を掘りくぼめているため、庭を囲む左右の袖石垣や、陽手・陰手（隅石）、墓庭への出入口の階段などには、岩盤を削って造り出した部分が目立つ。墓庭の床面は、削り出した岩盤の凹みに茶褐色土混じりの石粉を充填して整えている。墓の周囲にも同じ石粉を敷き詰めている。

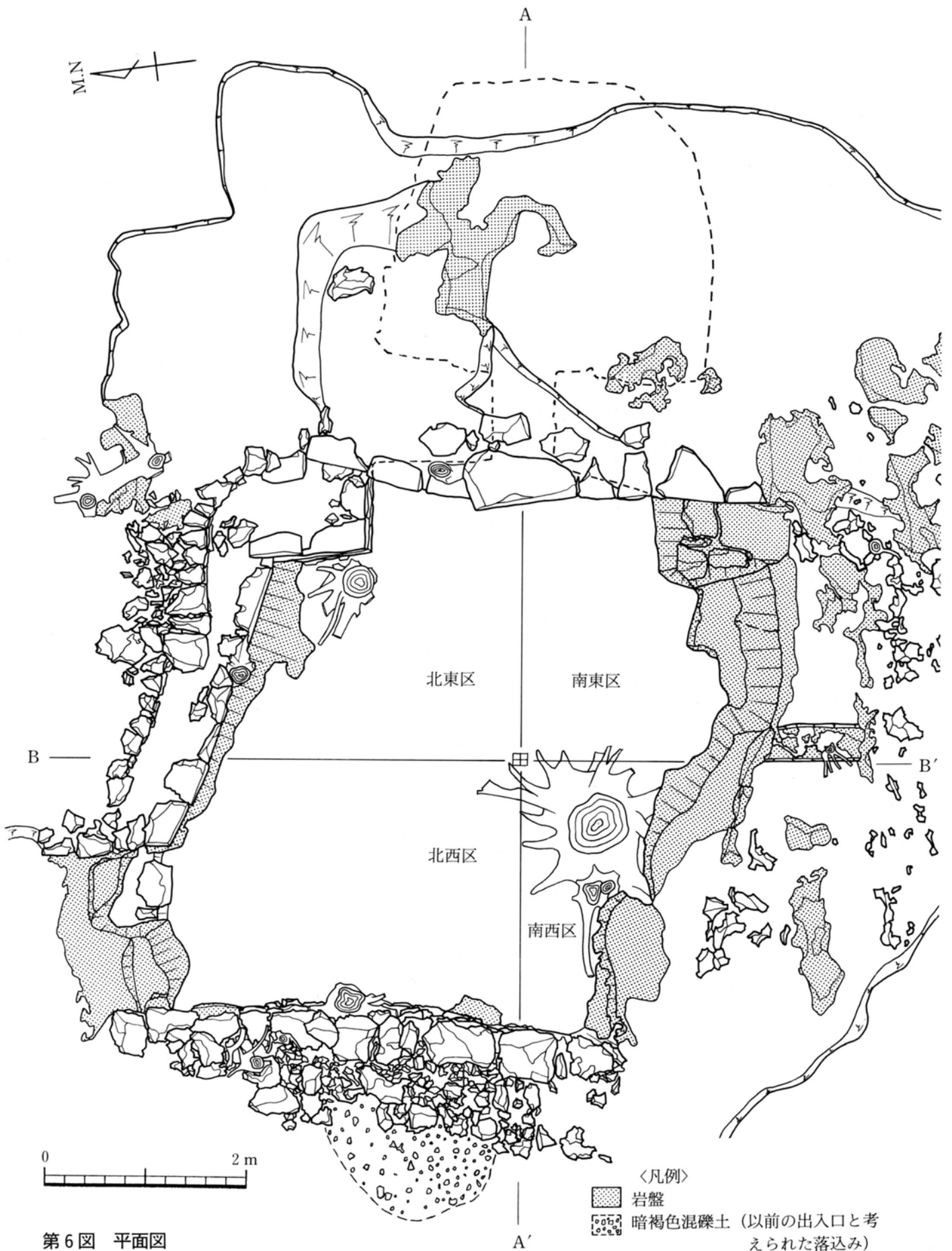
墓口に大型の切石を使用していることも特徴のひとつである。とくに墓口を構成する切石のうち上位のものは、巨大な一枚石（横約2m、縦約80cm、厚さ約40cm）を用いている。

墓口の床は数個の切石を敷き合わせ、隙間には石灰岩を粉砕した石粉を詰めている。床面と上面の中央付近に蓋石のかかりとして約4cmの段差をつくり出している。墓口のサイズは高さ80cm、巾62cm。蓋石（写真図版21-1）は一枚石でニーピヌ骨（細粒砂岩）を加工している。香炉（写真図版21-2）は石灰岩製で、蓋石の支えも兼ねている。この墓を発見した際には香炉と蓋石はすでに倒れていて、墓室内を覗くことが可能な状態にあった。

屋根は切石を直線的に並べ、庇を造り出している。切石の使用は庇の部分のみで、屋根上は地形の傾斜を生かしながら、小礫混じりの砂利を敷いて上面を整えている。ただし、庇の裏側は拳大～最長40cm大の石灰岩を裏込めしたあと、砂利を敷詰めている。庇は一部損壊し、墓庭に転落していた。破損した庇の上方に直径1.5～2mの円形の凹みがあることや、周辺から鉄片が出土していることを考え合わせると、去る沖縄戦で砲弾を受けたものと思われる。

墓室についてみると、柵は正面に3段、左右にそれぞれ1段設けられている。正面奥の一番柵（上段）から左柵は岩盤を削り出したもので、一連の柵になっている。二番柵（中段）・三番柵（下段）は縁石として切石を並べ、内側に石灰岩を粉砕した石粉を詰めて仕上げている。三番柵は正面から右柵にかけて一連になっている。これらの柵に囲まれて墓口側に汁ヒラシがあり、柵と同じように石粉を充填している。天井は岩盤の崩落により凸凹が著しくもろくなっている。

墓室を発掘した結果、岩盤の掘削は、墓庭から汁ヒラシにかけては床面をほぼ水平に保ちながら掘り進み、三番柵から二番柵までは縁石の設置を考慮してやや階段状に立ち上げ、そこから垂直に立ち上げて最上段の一番柵を造り出していることが明らかになった。墓室の面積は約8.3㎡。



第6図 平面図



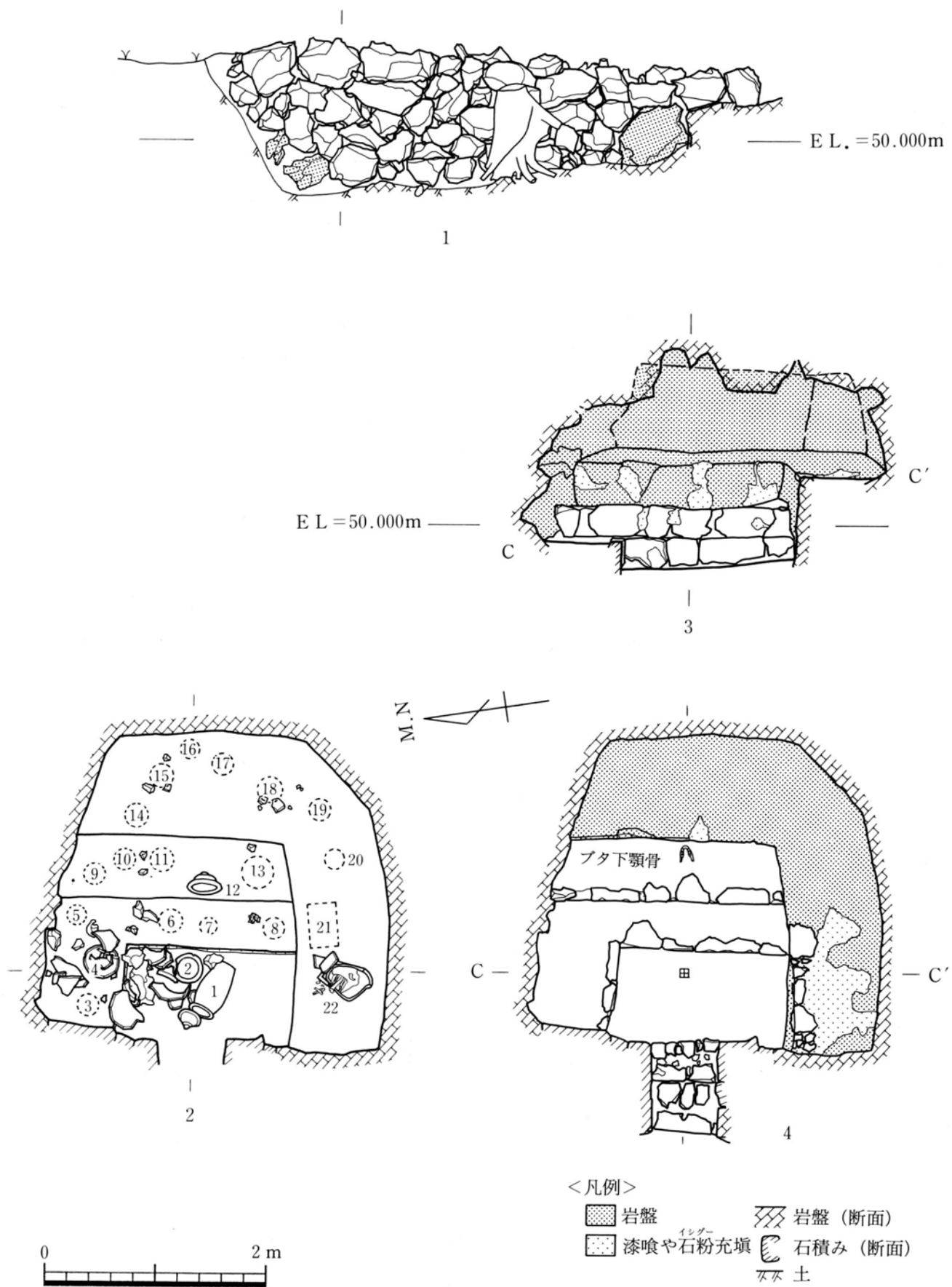
第7図 横断面見通し図



第8図 縦断面見通図 (南)



第9図 縦断面見通し図 (北)



第10図 1. 墓庭西側石垣 2. 墓室内蔵骨器配置図 3. 墓室横断面見通し図 4. 墓室平面図

2. 出土遺物

遺物は主に墓室および墓庭から出土したが、墓庭を囲む石垣の上や墓の周辺からの採取もあった。遺物の内容は蔵骨器や花瓶、キセルなど墓に伴うもののほか、ビー玉やガラス瓶、乾電池など明らかに近年紛れ込んだものもある。また、銃弾や薬莢、砲弾片など、この辺りが去る沖縄戦で激戦地であったことを物語る資料も出土した。蔵骨器のうち4基からは、中から貝殻やサンゴ片、釘、木片なども出土した。

本項では、出土遺物を(1)蔵骨器、(2)蔵骨器内検出遺物、(3)墓室内出土遺物、(4)墓庭出土遺物、(5)その他に分けて報告する。ただし、沖縄戦以降のものとみられるものについては記述を省いた。また、人骨については本章第2節に委ねた。なお、図示した遺物のうち、陶磁製品について施釉範囲が明確な場合は、図中に「→」で以て示した。

表1 出土遺物一覧

出土地点 出土遺物		墓 室				墓 庭				その他		計
		汁 ヒ ラ シ	三 番 棚 (下)	二 番 棚 (中)	一 番 棚 (上)	南 東 区	北 東 区	北 西 区	南 西 区	庭 石 積 上	墓 の 周 囲	
蔵 骨 器	身	2	6	4	9							21
	蓋	2	5	4	8							19
	破 片	14	8	1	7	14				3		47
陶 磁 器	花 瓶								2		1	3
	小 杯					1						1
	碗									1		1
	播 鉢										1	1
	壺									1		1
	不 明								2		5	7
キ セ ル	雁 首	1									1	2
	吸 い 口					1						1
銭貨（寛永通寶）							1					1
釘		1										1
シャコガイ						1						1
ブタ下顎骨				1								1
石斧											1	1
ガラス瓶・ガラス破片						7	1					8
ビー玉						1						1
鉄片（砲弾片）						5		2				7
銃弾及び薬莢								1			3	4
乾電池						1						1
赤煉瓦									1			1
ネコ（？）の骨		1										1

表2 蔵骨器内出土遺物

	人骨(体)	人骨以外の出土遺物
1号	1	土
2号	1	土/釘・木片約30点/針(?) 10本前後/環状金属品1点
3号	1	
4号	2	
5号	2	
6号	1	
7号	1	
8号	0	土/カンギク9点ほか海産・ 淡水産・陸産貝18点
9号	1	
10号	1	
11号	1	
12号	蓋のみ出土	
13号	3	
14号	2	
15号	2	
16号	1	
17号	1	
18号	2	
19号	2	釘および木片4点
20号	1	
21号	2	
22号	2	枝サンゴ片28点
計	30	

(1) 蔵骨器 (写真図版11～20)

調査の便宜上、墓室内の蔵骨器には、汁ヒラシ・三番棚 (下段)・二番棚 (中段)・一番棚 (上段) に配置されたものの順に、1～22号までの任意の通し番号を付けた。

蔵骨器はすべて陶製で、最初から蔵骨器として製作された厨子甕と、日用雑器を蔵骨器に転用したものがある。日用雑器からの転用品は、水甕 (6号) と荒焼の壺 (9号) を利用したものの2点で蓋は伴わない。

厨子甕は蓋19個・身19基があり、蓋と身がセットになったもの (1～5・7・8・10・11・13・15～22号)、蓋だけのもの (12号)、身だけのもの (14号) があつた。

墓室内は蔵骨器で満たされ、一番棚に14～22号、二番棚に9～13号、三番棚に3～8号、汁ヒラシに1・2号がそれぞれ配置されていた。入口近くの蔵骨器には天井部分からの落石により壊れたものはいくつかあり、その破片が汁ヒラシ周辺に散乱していた。一番棚の蔵骨器の中で最も入口に近い22号厨子甕も壊れており、その蓋の破片の大部分と身上部の破片のいくつかは墓庭およびその周辺から発見された。

銘書は1・2・4・5・10～21号に認められた。また、それらの厨子甕の中には、丸印を朱書したもの (5・11・12・16・18号) がある。

厨子甕には、甕型と御殿型がある。甕型は、ボージャー厨子 (5・14・16・22号)、マンガン掛け厨子甕 (1～4・7・8・10・11・13・15号)、マンガン掛け底つき厨子甕 (17・18・19号)、無釉甕型厨子甕 (20号) の4つに分けられる。

ボージャー厨子は4基である。器形は、最大径が胴上部にあり、口縁部は内湾し、口唇部が玉縁状に肥厚する。サイズに大小があり、最大高は大型のものが50cm、小型のものは35mほどである。ボージャー厨子の蓋には、小さな扁平玉形のつまみのつく形態 (20号) とつかない形態 (16号) がある。

マンガン掛け厨子甕は10基である。身正面の^{ヤージョウ}屋門の形態には、瓦屋根形態、唐破風屋根形態のもの (註)、逆U字形態がある。胴部の文様は、型抜きして貼りつけた蓮華文や沈線で蓮華文を表現している。マンガン掛け厨子甕の蓋頂部には宝珠形のつまみがつき、つまみの下に、削出しの台座が1段ないし2段設けられている。

マンガン掛け底つき厨子甕は3基である。身・蓋の両方に瓦屋根を表現した底をつける。胴部には、型抜きした蓮華文・法師像などを貼り付ける。また、身・蓋の底部分の降棟の先に型抜きした獅子頭を貼り付けるものがある。

無釉甕型厨子甕と仮称したものは1基 (20号) のみで、器形・文様の点ではマンガン掛け厨子甕とほぼ同様であるが、マンガン釉の掛からない無釉の厨子甕である。屋門の形態は、瓦屋根を模倣したもので、胴部には型抜きした蓮華文を貼り付ける。

御殿型の厨子甕は21号1点のみで、荒焼御殿型厨子甕である。身の部分には、胴上部に瓦屋根を表現した底を貼り付け、正面は唐破風の形態である。身正面の底下の胴部には、型取りした人物像と蓮華文を貼り付けている。同様に、身の両側面にも型抜きした蓮華文を貼り付けている。蓋は2層の瓦屋根を表現しており、大棟にはシャチホコを配している。2層の屋根のそれぞれの降棟の先には獅子頭を、蓋正面の唐破風の頂部には竜頭を貼り付けている。蓋は無釉であるが、身の部分はマンガン釉が掛けられている。

(註) 中村愿 「墓の形態と厨子甕のタイプについて」(『シンポジウム南島の墓』地域史協議会編、沖縄出版、1989年)

表3 蔵骨器観察表

蔵骨器番号	蔵骨器型式	サイズ (cm)								文様・その他の特徴	出土地点	備 考
		蓋			身							
		口 径		器高	口 径		胴部 最大径	器高	底径			
		外径	内径		外径	内径						
1	マンガン掛け 厨子甕	24.2	16.7	12.3	25.5	20.5	29.8	50.5	17.5	屋門（ヤージョウ）の左右に蓮華文、肩部に葉文。いずれも沈線による。屋門は逆U字形で、華奢。頸部から口縁部へゆるやかな曲線を描いて移行している。	汁ヒラシ	蓋内面に銘書。
2	〃	28.6	22.2	12.2	27.4	21.6	30.6	53.4	17.5	屋門の左右に蓮華文、肩部に葉文。いずれも沈線による。屋門は逆U字形。頸部から口縁部へゆるやかな曲線を描いて移行。底部に脚がつく。	汁ヒラシ	蓋内面に銘書。
3	〃	28.0	22.0	15.4	27.5	22.2	34.0	50.5	20.0	屋門の左右に蓮華文、肩部に5角形の葉状文を巡らす。いずれも沈線による。屋門は逆U字形。底部側面はつぶれ、若干張り出している。	三番棚	
4	〃	32.8	25.0	15.9	31.9	26.8	38.4	58.4	23.0	屋門の左右に蓮華文、肩部に波状文。蓮華文の茎と波状文は沈線、蓮華の花は貼り付けによる。屋門は逆U字形。頸部に小孔を巡らしている。	三番棚	蓋内面に銘書。
5	蓋はマンガン 掛けタイプ、 身はボージャ 厨子	31.8	23.2	16.3	—	17.0	35.2	28.4	18.7	四角形の家形貼り付け文。肩部及び口縁部に横位沈線文。家型貼り付け文の上位に沈線の「〇」印。	三番棚	蓋内面に銘書。 身の外面と蓋内面に 朱書きの「〇」印。
6	水甕の転用品	—	—	—	28.7	23.6	34.7	56.9	22.2	肩部に横位凸帯文、その上位に円盤貼り付け文を巡らしている。同部に沈線による「  」印。立ち上がり部内面に小さな亀裂あり。	三番棚	蓋は無し。
7	マンガン掛け 厨子甕	28.6	21.6	15.0	26.7	22.4	34.2	50.0	18.7	屋門の左右および肩部に沈線による蓮華文。屋門は逆U字形。マンガンの施釉は雑。器面は荒れ、気泡やアバタ状になった部分が目だつ。器形もいびつに変形している。	三番棚	
8	〃	29.1	21.8	16.1	25.9	21.9	36.9	50.2	19.8	屋門の左右および肩部に沈線による蓮華文。屋門は逆U字形。器面は、気泡やアバタが目だち、器形も変形している。	三番棚	

蔵骨器番号	蔵骨器型式	サイズ (cm)								文様・その他の特徴	出土地点	備 考
		蓋			身							
		口 径		器高	口 径		胴部最大径	器高	底径			
		外径	内径		外径	内径						
9	荒焼壺の転用品	—	—	—	—	—	30.8	34.5	18.3	荒焼壺の上半部を除去し、胴中央から底部にかけて利用。上半部の除去は均等ではなく、胴上部が部分的に高く残っている。	二番棚	蓋はなし。
10	マンガン掛け厨子甕	29.2	23.2	15.0	29.4	24.8	36.2	55.3	22.7	屋門の左右に蓮華文。花は貼り付け文、茎は沈線で表現。屋門は唐破風屋根形。	二番棚	屋門内部および蓋内面に銘書。
11	〃	28.5	22.0	15.8	28.8	23.5	35.0	50.7	23.4	屋門の左右に蓮華文。花は貼り付け文、茎は沈線で表現。屋門は瓦屋根形。焼成時の亀裂を漆喰で補修。	二番棚	口縁外部および蓋内面に銘書。 蓋内面に朱書きの「〇」印。
12	器形はマンガン掛けタイプで無軸。蓋のみ。	33.2	23.4	17.7	—	—	—	—	—	宝珠形つまみは下端部がつぶれ、傾いている。台座との接着部の調整も雑。	二番棚	蓋内面に銘書および朱書きの「〇」印。
13	マンガン掛け厨子甕	32.6	26.6	19.8	32.4	26.8	40.0	65.4	25.1	屋門の左右に蓮華文。花は貼り付け文、茎は沈線で表現。屋門は唐破風屋根形。肩部に数本単位の沈線で鋸歯文。	二番棚	屋門内部と蓋内面に銘書。
14	ボージャー厨子。身のみ。	—	—	—	—	26.8	35.6	53.4	22.4	四角形の家形貼り付け文。肩部および口縁部に横位沈線文。焼成時の亀裂を漆喰で補修。	一番棚	口縁外面に銘書。
15	マンガン掛け厨子甕	31.3	24.5	16.4	31.0	26.1	40.2	63.0	25.4	屋門の左右に蓮華文。蓮華の花は貼り付け文、茎は沈線で表現。屋門は瓦屋根形。	一番棚	蓋内面に銘書。
16	ボージャー厨子	25.0	23.3	5.6	—	18.1	25.5	37.8	17.8	四角形の家形貼り付け文。肩部および口縁部に横位沈線文。	一番棚	口縁外面および蓋内面に銘書。屋門内部および蓋内面に朱書きの「〇」印。
17	マンガン掛け庇つき厨子甕	31.8	23.6	15.6	31.0	26.6	35.7	56.6	23.2	屋門の左右に蓮華文と法師像の貼り付け文。蓮華の茎は沈線で描く。屋門は唐破風形に屋根瓦を表現。身の肩部から庇にかけて瓦屋根を表現。蓋は二層構造で、上部は屋根瓦を表現。蓋は亀裂を漆喰で補修している。	一番棚	屋門内部および内面胴部、蓋内面に銘書。屋門内部と内面胴部は朱書きの文字もある。*「浦添按司御乳母呉勢」の甕。

蔵骨器番号	蔵骨器型式	サイズ (cm)								文様・その他の特徴	出土地点	備 考
		蓋			身							
		口 径		器高	口 径		胴部最大径	器高	底径			
		外径	内径		外径	内径						
18	〃	30.2	20.8	18.0	33.3	28.2	45.0	68.7	26.5	屋門の左右に蓮華文。花は貼り付け文、茎は沈線で描く。屋門は瓦屋根形。蓋および身肩部から庇にかけて屋根瓦を表現。蓋には垂木も表現されている。	一番棚	蓋内面に銘書および朱書きの「〇」印。
19	〃	27.8	21.9	17.7	28.1	23.0	36.6	56.5	22.7	屋門の左右に蓮華文と法師像の貼り付け文。蓮華文の茎は沈線で描く。屋門は唐破風形。肩部には葉文状の円形沈線文を巡らし、庇には屋根瓦を表現。蓋は二層構造で、上部は屋根瓦を表現。	一番棚	蓋鏝下面に銘書。
20	無釉甕型厨子甕。蓋はボージャー厨子タイプ。	31.4	30.6	10.5	27.8	23.3	34.2	50.2	22.5	屋門は瓦屋根形で、屋根以外は蓮華の貼り付け文でかたち作っている。装飾は屋門および肩部と胴下部に巡る凸帯だけで、全体的に簡素。	一番棚	蓋の内外面および身の胴部外面に銘書。
21	荒焼御殿型厨子甕	55.5 × 31.7	35.6 × 20.8	31.9	42.4 × 31.2	35.4 × 24.6	—	43.7	40.5 × 29.0	身の口縁下に瓦屋根を表現した庇を巡らす。正面は唐破風の形態。庇の四隅および正面に獅子頭を付ける。屋門の左右には人物像と蓮華文を、他面では蓮華文のみを貼り付ける。底部の四隅には脚。蓋は二層構造で瓦屋根が表現され、四隅には獅子頭、正面に竜頭、大棟には一對のシャチホコが貼り付けられている。身外面にはマンガンを施す。	一番棚	蓋内面に銘書。
22	ボージャー厨子	30.8	29.5	9.6	—	26.5	36.7	43.6	22.4	四角形の家形貼り付け文。肩部と口縁部に横位沈線文。家形貼り付け文の左側に窯印？ が線彫りされている。	一番棚 *破片は墓庭と墓周辺	

(2) 蔵骨器内の検出遺物 (図版11・13・18・20)

1・2・8・19・22号蔵骨器の内容物には、人骨以外のものもいくつかあった。

1号厨子甕には、人骨とともに土が入っていた。この土は墓の周辺に分布する島尻マーグと異なり、ニービに類似している。

2号厨子甕内にも同様に土が入っており、これは島尻マーグ土と思われる。この土中からは、木片の付着した釘や針とみられる細い鉄製品を数本束ねたもの、さらに指輪と思われる長さ1cmほどの細い湾曲した金属製品が確認できた(図版11)。釘には、直角に交差した状態のものもあり、木棺に使用したものと思われる。針とみられるものの表面の一部には、布目の痕跡のようなものが認められるので、布に包まれていたのではないかとと思われる。

8号厨子甕の内部には人骨はなく、土だけが入っていた。土はジャーガル土とみられ、その土中にはカンギクなどの海産貝のほか、淡水産、陸産とみられる貝類が確認できた(図版13)。

19号厨子甕内にも腐植土状の少量の土が入っていた。また、木片の付着した釘が確認できた(図版18)。

22号厨子甕内には、人骨とともに枝サンゴ28点の破片が入っていた(図版20)。

(3) 墓室内出土遺物 (第11図、図版21)

墓室内からは蔵骨器のほかに、柵^{クサ}から出土したプタ下顎骨や、汁ヒ^{シル}ラシから採取したキセルおよび釘などがある。キセルと釘は図示し、プタ下顎骨については写真のみで示した。

第11図1はパイプ形のキセル雁首で、沖縄産施釉陶製。胎土は白く、やや緻密で内外面に透明釉を施している。ただし、羅字^{ラジ}接続部の縁辺は無釉。羅字接続部の縁に紐ずれに似た小さな傷が1ヶ所認められ、焼成後のものと考えられるが、紐ずれかどうかは断定し難い。

同図2は長さ3.6cmの鉄製釘である。頭部の正面観はバチ形状で、薄く、上面から観ると長方形となっている。胴部は断面四角形で、錆が付着している。この種の釘は汁ヒラシに置かれていた2号厨子甕の内部から、木片とともに多量出土しており、本品はこれらの中の一つがこぼれ落ちたものとみられる。

写真図版21-3はプタとみられる下顎骨で、二番柵(中段)の造成土(石粉^{イシコ})内から出土した。墓造成の際に埋納したものと考えられる。出土地点はちょうど墓室割付の縦軸線上に位置し、顎先は墓室奥に向けられていた。本資料は下顎枝(註)の中位でほぼ水平に切断されており、同部近くの創痕から、切断には鋭利な刃物を使用したことがわかる。

本資料については、民俗学の分野から造墓儀礼との関連が指摘されている。詳しくは本章第3節(31P)を参照されたい。

(註) 下顎骨の部位は『家畜解剖図説-上巻-』(加藤嘉太郎著、養賢堂発行、1979)を参考にした。

(4) 墓庭出土遺物 (第11図、図版21)

墓庭で採取した遺物は、いずれも表採または表土層からの出土であった。花瓶3点と、小杯、キセル、銭貨はそれぞれ1点図示し、シャコガイについては写真で示した。

第11図3は白色の胎土に乳白色の釉薬を施す花瓶である。胴上部には紺、赤、緑、黄色に彩色した葉文を巡らしている。葉文の輪郭は茶色を呈し、緑色のものについては内部の葉脈も表現している。

4色の葉文のうち、赤、緑、黄色の着色は上絵付けによる。底部は碁け底状に仕上げ、畳付は露胎としている。胴下半部には水挽きによる凹凸が残る。本資料は口縁部が意図的に打ち欠かれており、葬送儀礼の宗教的な意味をもつものと解されるが、今のところ詳細は明らかにし得ない。本土産と考えられる。墓庭南西区で表採。

4は無釉の花瓶で、器面および破損面ともこげ茶色を呈する。胎土は精選され、焼成良く、堅緻。器形は胴下半部で膨らみをみせ、そこから次第に頸部へすぼまり、口縁部はラッパ状に開く。底部には断面がハの字形に開いた脚台をつけているが、破損のため全容は示し得ない。本土産か？。墓庭南西区で表採。

5は白釉の小杯で、釉薬は内面から外面腰部まで施し、高台脇から外底は露胎となる。腰部はわずかに丸みを帯び、口縁上端は微弱な外反を示す。釉薬全体に細かい貫入がはしる。口径3.2cm、器高1.9cm、底径1.6cm。沖縄産。墓庭南東区の表土から出土。

6はキセルの吸い口で、胎土は白く、緻密、淡灰色の釉薬を施している。形状はビール瓶の上半部に似ている。墓庭南東区の表土から出土した。

7は寛永通寶で、わずかに欠けるが文字は完全に判読できる。直径2.4cm、厚さ1mm。墓庭の北東区表土から出土。

写真図版21-11はシラナミ（シャコガイ科）で、墓庭南東区の表土から出土した。とくに加工は認められない。葬送儀礼に関するものと解されるが、詳細は不明。殻長9.1cm、殻高4.8cm、重量28g。

(5) その他（第11図、図版21）

ここで扱う資料は、墓庭の石垣上や墓の周辺から採取したもので、花瓶、碗、キセル、石斧をそれぞれ1点掲載した。

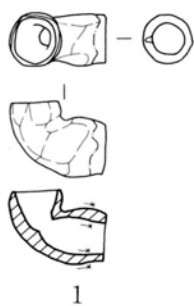
第11図8は胴部から底部にかけての資料で、器形や大きさから花瓶と考えられる。外面には鉄釉が施されるが、畳付は施釉後、ヘラケズリにより釉剥ぎされ、露胎となっている。内面は無釉で、胎土は淡黄色を呈する。器形は底部から胴部へほぼ直線的に移行し、胴部に膨らみはみられない。底径は5.7cm。沖縄産。墓西側の墓道表土から出土。

9は灰釉碗の底部破片で、内外面ともに腰部以下は露胎であることから、つけ掛けによる施釉とみられる。腰部はやや丸みを帯びる。底径約7cm。沖縄産。墓庭西側の石積み上から表採。

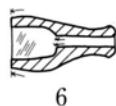
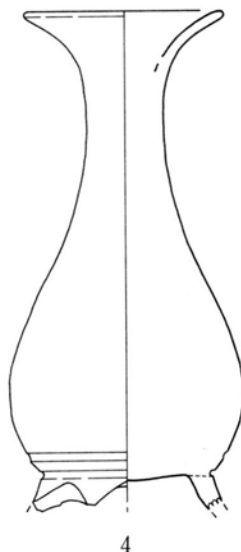
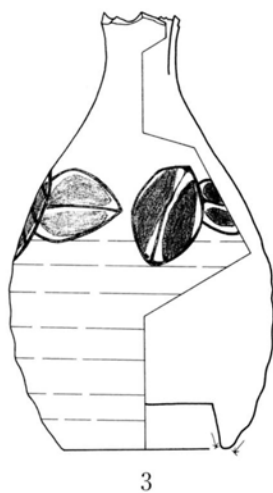
10は沖縄産施釉陶製のパイプ形雁首で、形状や胎土など同図6の資料に類似している。釉薬も透明釉を施す点で共通しているが、本標品の内面への施釉は火皿のみに留まっており、施釉範囲については同図6の資料と若干の違いをみせている。羅字接続部には同図6と同様、紐ずれ様の跡が3ヶ所認められる。墓西側の墓道表土から出土。

11は短冊形両刃の石斧である。研磨調整は表裏両面ともほぼ全面におよぶが、縁辺には調整剥離のこる。刃部は小さな刃こぼれが連続し、鋭さを失っている。本資料は墓庭西石積みの外側から出土したもので、本墓よりもむしろ、近接する他の遺跡との関連性が考えられる。最大長10.2cm。最大幅6.1cm。重量234g。

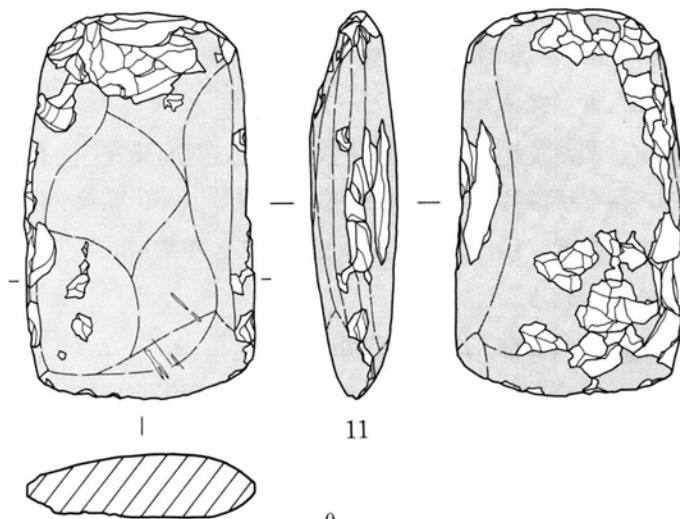
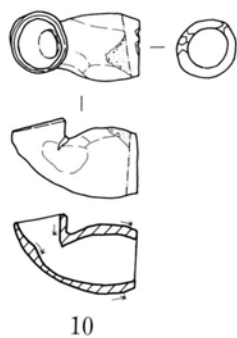
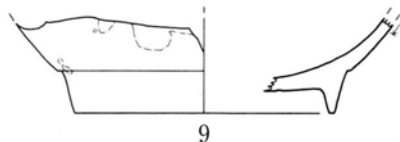
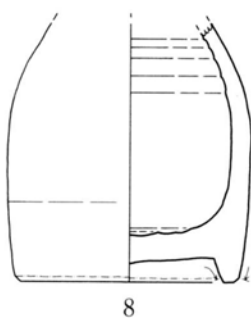
〈墓室内出土〉



〈墓庭出土〉



〈その他（墓庭石垣上、墓周辺）出土〉



第11図 出土遺物

第2節 伊祖の入れ御拝領墓出土の人骨

土 肥 直 美

(琉球大学医学部解剖学第1講座)

1. はじめに

沖縄県浦添市伊祖の入れ御拝領墓から21個の厨子甕に納められた30体の近世人骨が出土した。多くの厨子甕には銘書があり、被葬者の名前、洗骨年等が記されていたことから、厨子甕や人骨からの情報を総合することによって家系図の復元が試みられている。人類学的には沖縄近世人の形質を知ることはもちろんのこと、骨格形態の遺伝性を知る上でも貴重な資料である。

2. 出土人骨

人骨は表4に示すとおり、男性9体、女性14体、不明（若年・幼小児を含む）7体の計30体である。しかし、保存状態が全体的に悪く、計測に耐え得るような人骨は少なかった。

3. 人骨所見

1号厨子甕人骨（女性・老年）

保存状態は比較的良好で、ほぼ一体分の全身骨が識別できた。頭蓋骨の形態および寛骨の形態は典型的な女性の特徴を示しており、寛骨には女性の妊娠・出産に関連すると考えられている前耳状溝も認められることから、本人骨の性別は女性である。また、年齢については、ほとんどの歯が死亡前に脱落しており歯槽骨の吸収も顕著であることから、老年（60才以上）に達していたと推定される。骨格は全体的に華奢である。

2号厨子甕人骨（女性・熟年）

頭蓋骨の顔面部分が破損しているが、保存状態の比較的良好な全身骨一体分が識別された。四肢骨は1号厨子甕人骨に比べると頑丈であるが、寛骨に前耳状溝が認められることから性別は女性である。年齢は残存する歯牙の咬耗度がBrocaの二度であることから、熟年（40代～50代）と推定した。

3号厨子甕人骨（女性・成年）

保存部位は頭蓋骨片、左右上腕骨骨体部片、左右寛骨片、左右大腿骨近位部片、左右脛骨片等、一体分である。保存状態は悪く、詳細な鑑別は難しいが、寛骨片の特徴から性別は女性の可能性が強い。また、歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から、年齢は成年（20代～30代）と推定される。脛骨に骨膜炎の痕跡が認められる。

4号厨子甕人骨（女性・成年、不明・成年）

歯牙が2体分検出されていることから、4号厨子甕の被葬者は二人である。保存部位は頭蓋骨片、左右上腕骨骨体部片、右大腿骨片、左右脛骨片等であるが、保存状態が悪く、個体の識別は困難である。四肢骨の特徴から一体の性別は女性の可能性が強い。また、歯牙の咬耗度から年齢はいずれも成年（20代～30代）と推定される。

5号厨子甕人骨（不明・若年、不明・胎児～新生児）

骨片と歯牙が少量検出された。性別は不明である。年齢は、寛骨の癒合が不完全であり、第3大臼歯の根の形成が不完全で未萌出であることから、14～15才前後と推定される。また、本厨子甕には胎児～新

生児のものと推定される形成段階の乳歯が含まれていた。

6号厨子甕人骨（男性・成年後半～熟年前半）

頭蓋骨顔面部は破損しているが、比較的保存の良い人骨一体分が検出された。頭蓋骨の形状、四肢骨の形状ともに男性の特徴を示している。年齢は残存する歯牙の咬耗度から、40才前後と推定される。

7号厨子甕人骨（女性・成年）

頭蓋骨および寛骨の形状から女性と推定される人骨が一体分検出された。また、寛骨には前耳状溝が認められることから、本人骨は経産婦の可能性が高い。年齢は歯牙の咬耗度（Brocaの1度）から、成年（20代～30代）である。右橈骨遠位部と右脛骨遠位部に骨折痕が認められた。

8号厨子甕人骨

骨は全く残存していない。

9号厨子甕人骨（女性・成年後半～熟年前半）

四肢骨片が華奢であることから女性と思われる人骨が一体分検出された。年齢は歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から40才前後と推定される。

10号厨子甕人骨（女性・成年）

頭蓋骨片と下肢骨片が一体分検出された。全体に保存状態が悪く、上肢骨と体幹骨の大部分は消失している。下肢骨は華奢である。下肢骨および頭蓋骨の特徴から本人骨の性別は女性、また、歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から、年齢は成年後半と推定される。

11号厨子甕人骨（不明・若年）

四肢骨の骨端部が癒合していないこと、第3大臼歯の根がほぼ完成していることから、15～20才と思われる未成人骨が一体分検出された。性別等の詳細は不明である。

12号厨子甕人骨

人骨は検出されなかった。

13号厨子甕人骨（男性、女性、不明）

保存状態は良くないが、比較的多量の骨片が検出された。骨を鑑別したところ、成人（20才以上）と思われる大腿骨が3対あり、少なくとも3体分の人骨が納められていたことは確かである。被葬者の構成は、四肢骨の形状から男性一人と女性一人、残りの一体については今一つ決め手になるような特徴がなく不明である。また、咬耗度の弱い（Brocaの1度）歯牙が20本以上残存することから、被葬者の年齢はいずれも比較的若かったと思われるが、個体識別は困難で詳しい年齢構成は不明である。

14号厨子甕人骨（男性？・成年、不明・胎児～新生児）

保存不良の人骨片が検出された。大腿骨が頑丈であることから、性別は男性の可能性が高いが、サイズはそれほど大きくはないので女性の可能性も否定できない。歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から、年齢は成年後半と推定される。

このほか、胎児～新生児と思われる歯牙片、椎骨片、肋骨が認められた。

15号厨子甕人骨（男性・成人、女性・成人）

成人の大腿骨が2体分あることから、この厨子甕には二人分の骨が納められていたと思われる。さらに、大腿骨のサイズには大きなものと小さなものとがあることから、二人は男女であった可能性が高い。詳細な年齢は不明であるが、歯槽骨の吸収が顕著な上顎骨片が認められることから、一方は老年に達していたと推定される。

16号厨子甕人骨（不明・幼児）

比較的保存良好の幼児骨が一体分検出された。歯の萌出状態から、年齢は3才前後と思われる。

17号厨子甕人骨（女性・老年）

保存状態のあまり良くない人骨一体分が検出された。全体にサイズが小さく華奢であることから、性別は女性と推定される。年齢については、残存する上顎骨の歯がほとんど生前に脱落していたと思われることから、かなり高齢であったことがうかがえる。銘書によれば、この厨子甕に納められている人物は71才の女性ということであるが、骨からの所見もこの記録を裏付けている。

18号厨子甕人骨（男性・成人、女性・成人）

保存状態はあまり良くないが、上腕骨片、大腿骨片、脛骨片が各2体分ずつ確認されたので、この厨子甕には二人分の人骨が納められていたものと思われる。四肢骨の形状から、二人はおそらく男女である。年齢はいずれも成人（20才以上）には達していたと思われるが詳細は不明である。しかし、椎体片に骨棘の形成が認められたものがあるので、かなり高齢のひと、あるいはかなりの重労働に従事したひとが含まれているものと思われる。また、女性の右橈骨遠位部に骨折痕と思われる病変が認められた。

19号厨子甕人骨（男性・熟年、女性・老年）

骨格の特徴から男女と思われる人骨各一体が検出された。保存状態は比較的良好である。年齢は男性は歯の咬耗度（Broca の2度）から熟年、女性はほとんどの歯槽が閉鎖し吸収も進んでいることから老年に達していたと推定される。

20号厨子甕人骨（男性・成人）

四肢骨の形状から成人の男性と推定される人骨一体分が検出された。保存状態が悪く、詳細は不明である。

21号厨子甕人骨（男性・成年、女性・老年）

二体分の人骨が検出された。保存状態はあまり良くない。骨格の形状はこの二体が男女であることを示している。また、年齢については、歯牙の咬耗度から男性は成年、女性は老年に達していたと思われる。

22号厨子甕人骨（男性・成年、女性・成人）

骨の保存状態は悪いが、大腿骨が左右2本ずつ残存していることから、この厨子甕に納められている人骨は最低二体分である。寛骨の形状および歯の咬耗度から一体が成年（20代～30代）の男性であることは確実であり、残りの一体についても成人（20才以上）女性の可能性が強い。しかし、検出された多数の歯牙は個体識別が困難なものも多く、あるいはさらに被葬者の数が増える可能性も否定できない。

4. 人骨の形質

全体に保存状態が悪く、計測できたものは少なかった。主な計測値は表2～5に示すとおりである。顔面部の計測ができたものは少ないが、得られた計測値は南西諸島人の形質について従来から言われている低顔の傾向を示している。また、推定身長も男性が155.2cm（ $n=2$ ）、女性が143.8cm（ $n=5$ ）で低身長の傾向が強い（表9）。周辺諸集団との関係等について数量的解析は資料数が不十分なために行わなかったが、低顔・低身長の傾向から推察すれば、これまでに報告されている南西諸島近世人と同様の特徴を持っていると考えて大過ないであろう。

5. 被葬者の親族関係

被葬者の血縁関係はその時代の親族構造や社会について非常に多くの情報を提供することから、人類学および考古学の両分野からこれまでに様々な推定が試みられてきた。(春成,1982;辻村,1983;etc.)。人類学の分野からは埴原他(1983)が歯冠計測値の類似度(Q-相関関係)を用いて被葬者の血縁関係を推定する方法を提唱して以来、土肥他(1986)はさらに方法の検討を行うとともに、主に古墳被葬者の血縁関係推定などに広く適用を試みてきた(田中他,1985;土肥・中橋,1991;etc.)。

入め御拝領墓の最大の特徴は、銘書や考古学的情報から被葬者の血縁関係がある程度推定できるという点である。この様な例は極めて希であり、ほとんどの遺跡では出土した人骨個々に関する情報を期待することはできない。復元された家系図と人骨の情報がどの程度適合するかをみておくことは、今後の研究に対して重要な示唆を与えるものと思われる。そこで、人骨からの情報として、まず最も精度の高いDNAによる鑑定法が適用できるかどうかの調査を琉球大学医学部法医学教室に依頼した。しかし、骨の保存状態が悪かったためにDNAの抽出は難しいことが分かった。そこで、次に歯冠計測値を用いる方法を試みることにした。御拝領墓人骨の歯冠計測値は表10に示すとおりである。歯冠計測値が得られているのは2、5、10、11、21号である。残念ながら2号はデータが不十分であるが、他は兄弟の関係にあると推定されており、分析の対象としては有効な情報が期待できる。そこで10項目以上の変数が共通して得られ、しかも出来るだけ多くの個体を含む組み合わせを用いてQ-相関関係を計算した(表11)。尚、データはMatsumura(1995)の江戸時代人を用いて基準化した。Q-相関係数は個体間の類似度を示す係数であり、+1が最大、-1が最小の類似度を示す。いずれの組み合わせにおいても4号(性別不明・成年)と11号(性別不明・若年)の類似度が高く、非常に近い血縁関係にあったことが推察される。また、③の組合せでは4号(女性・成年)と7号(女性・成年)の類似度が高い。そのほか、5号?と10号♀、4号?と4号♀も全体的に高い類似傾向を示している。4号も7号も銘書がなく、復元された家系図での位置が分からないのは残念であるが、御拝領墓の被葬者が確かに近い関係であることを支持する結果である。第12図は③の相関行列を基にクラスター分析を行い、御拝領墓被葬者の関係を樹状図で表したものである(バックグラウンドは西日本現代人)。

御拝領墓出土人骨の所見は以上の通りである。保存状態が悪く、人類遺伝学的解析が十分に出来なかったのは残念であるが、沖縄の古墓からは今後も銘書のある厨子甕に納められた人骨の出土が期待できることから、このような資料の更なる出土を待ちたい。

謝辞:

小稿を終えるに当たり、人骨調査の機会を与えていただいた浦添市教育委員会の皆様に心より感謝いたします。

参考文献

- 田中良行・土肥直美・船越公威・永井昌文,1985:上ノ原横穴墓被葬者の親族関係.上ノ原遺跡群IV,大分県教育委員会,pp.10-16.
- 辻村純代,1983:東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬.季刊人類学,12(2):52-83.
- 土肥直美・田中良行・船越公威,1986:歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用.人類学雑誌,94(2):147-162.
- 土肥直美・中橋孝博,1991:津屋崎町宮司井出ノ上古墳の人骨について.津屋崎町文化財調査報告 第7集,津屋崎町教育委員会,pp.51-64.
- 埴原和郎・山内昭雄・溝口優司,1983:岩手県二戸市上里遺跡出土人骨の血縁性に関する統計学的推定.人類学雑誌,91(1):49-68.

春成秀爾,1982:土井ヶ浜集団の構造.森貞次郎博士古希記念古文化論集,森貞次郎先生古希記念論文集刊行会,355-376.

Matsumura,H., 1995: A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology.Nat.Sci.Mus.

Monographs,No.9.

表4 入め御拝領墓出土人骨一覧

	男	性	女	性	不	明	未	成	人	計
1号厨子甕				1						1
2号厨子甕				1						1
3号厨子甕				1						1
4号厨子甕				1		1				2
5号厨子甕								2		2
6号厨子甕	1									1
7号厨子甕				1						1
8号厨子甕										0
9号厨子甕				1						1
10号厨子甕				1						1
11号厨子甕								1		1
12号厨子甕										0
13号厨子甕	1			1		1				3
14号厨子甕	1							1		2
15号厨子甕	1			1						2
16号厨子甕								1		1
17号厨子甕				1						1
18号厨子甕	1			1						2
19号厨子甕	1			1						2
20号厨子甕	1									1
21号厨子甕	1			1						2
22号厨子甕	1			1						2
計	9			14		2		5		30

表5 入め御拝領墓人骨の頭蓋主要計測値

	男	性	女	性	
	6号墓	19号墓	1号墓	7号墓	19号墓
1 Max. cranial l.	183	175	170	171	183
5 Naso-basilar l.			94		
8 Max. cranial b.	137	141	139	135	
9 Min. front. b.		82	88	89	
11 Biauricular b.	127		125	118	
17 Basi-bregmat. h.			132	131	
45 Bizygomatic b.			133	126	
46 Middle facial b.		97	97	93	
48 Upper facial h.		67		63	
511 Orbital b.(1)		38	39	39	
521 Orbital h.(1)		31	33.5	31	
54 Nasal b.		29	27	22	
55 Nasal h.		47	50	44	
65 Bicondylar b.				115	
66 Bigonial b.	104		88	98	
69 Symphysial h.	32			32	
69(3)1 Mand. body thick (1)	13			13	
701 Ramus h.(1)				54	
711 Ramus b.(1)	37		28	32	

8/1	Cranial index	74.9	80.6	81.8	78.9
17/1	Length-height index			77.6	76.6
17/8	Breadth-height index			95.0	97.0
48 /	Upper facial index	69.1			67.7
46					
52 /	Orbital index (1)	81.6	85.9	79.5	
51					
54 /	Nasal index	61.7	54.0	50.0	
55					
71 /	Ramus index (1)			59.3	
70					
Facial flatness					
Frontal chord		86	90	93	
subtense		12.4	11.7	13.8	
index		14.4	13.0	14.8	
Simotic chord		6.5	8.2	7.7	
subtense		0.8	1.7	2.2	
index		12.3	20.7	28.6	
Zygomaxillary chord		94	95.6	93	
subtense		17.1	19.8	22.1	
index		18.2	20.7	23.8	

表6 入め御拝領墓人骨の頭蓋非計測的小変異

Tait's		1号♀		2号♀		6号♂		7号♀		19号♂		19号♀	
		r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l
1	Metopism	-	-					-	-	-	-		
2	Supra-orbital foramen	-	-					-	+	-			
3	Supra-orbital nerve groove	-	-			-	-	+	+	-	-		
4	Accessory infraorbit. foramen	-	-					+	+	-	-		
5	Transv. zygomatic suture	-	-							-			-
6	Medial palatine canal	-	-							-	-		
7	Ossicle at the lambda	-	-			+	-	-	-				
8	Os incae	-	-			-	-						
9	Biasterionic suture(10mm<)	-	-			-	+	-	-				
10	Sagittal sinus groove left	-	-			-	-						
11	Condylar canal absent		-					-	-				
12	Hypoglossal canal bridging	-	-							-			
13	Jugular foramen bridging	-	-							-			
14	Asterionic ossicle	-	-			-	-						
15	Occipitomastoid ossicle	-	-										
16	Pterygospinous foramen	-	-										
17	Tympanic dehiscence	-	-	-	-	+	+	-	-				
18	Aural exostosis	-	-	-	-	-	-	-	-				
19	Parietal notch bone(5 mm<)	-	-	-	-	+							
20	Epipterice ossicle	-	+							-			
21	Frontotemporal articulation	-	-							-			
22	Multiple mental foramina	-	-	-	-	-	-						
23	Mandibular torus	-	-	-	-	-	-						
24	Mylohyoid canal	-	-	-	-	-	-						

表7 入れ御拝領墓上肢骨の主要計測値

(mm)

Humerus			男 性				女 性					
			6 号	19号	21号	22号	1 号	2 号	7 号	19号	21号	22号
1	Max. length	r	289	273				276	276		244	
		l						268				
2	Total length	r	287	268				268	261		243	
		l						265				
3	Upper epiphisial width	r	43					41	39		39	
4	Bicondylar width	r	51	49.5	57.5	57		50	47		47	
		l						48	47		48.5	
5	Max. diam. of mid-shaft	r	19	22.5		21	19	20	19	20	18.5	
		l	18			22	18	19.5	18		19.5	
6	Min. diam. of mid-shaft	r	15	18		15.5	13	16	13.5	14.5	13	
		l	15			15.5	13.5	14.5	14		13	
7	Least circumf. of shaft	r	57	61		58	49	59	50	52	51	
		l	55			58	50	57	50		52	
7a	Circumf. of mid-shaft	r	59	66		60	53	60	54	56	52	
		l	57			62	51	57	53		53	
8	Circumf. of head	r	133					115	111		104	
9	Transv. diam. of head	r	40					34	33		33	
10	Sagit. diam. of head	r	44					36	36.5		33	
6/5	Index of cross-sec.	r	78.9	80.0		73.8	68.4	80.0	71.1	72.5	70.3	
		l	83.3			70.5	75.0	74.4	77.8		66.7	
7/1	L-T index	r	19.7	22.3				21.4	18.7		20.9	
		l						21.3				
Ulna												
1	Max. length	l						220	219			
2	Physiological length	l						200	194			
3	Least circumf. of shaft	r	28	36			30				31	
		l	29	38				35	28	30		
6	Width of olecranon	r	22						18	21		
		l					20		18			
7	D-V diam. of olecranon	r	22						18.5	21.5		
		l	23						20.5			
8	Height of olecranon	r	19						18	18.8		
		l	20				16		15.5	18.3		
11	D-V diam. of shaft	r	11	12.8	12	13	10.5	10.5	10	10		
		l	11.5	12		13.5	11	12	10	9.5		12
12	Transv. diam. of shaft	r	15	16.5	16	15.5	14	14	13	12		
		l	15	16.6		15.5	13	12	13	12.5		15
3/2	L-T index	l						17.5	14.4			
11/12	Index of cross-sec	r	73.3	77.6	75.0	83.9	75.0	75.0	76.9	83.3		
		l	76.7	72.3		87.1	84.6	100.0	76.9	76.0		80.0
Radius												
1	Max. length	l	220								207	
2	Functional length	l	210									
3	Least circumference	r	37				32	35			33	
		l	39	40			32	33	35	33		
4	Transv. diam. of shaft	r	14			15.5		15.5	14	13.3		
		l	14	18			13.5	15.5	14	12.5		
4a	Transv. diam. of mid-shaft	r						14.5				
		l	13.5								12	
5	D-V diam. of shaft	r	11			11		10	9.5	10		
		l	11	11.5			10	10	9.5	10.5		
5a	D-V diam. of mid-shaft	r						10				
		l	11								10	
5(5)	Circumf. of mid-shaft	r						39				
5(6)	Width of lower epiph.	r						31				
		l	30					30		29		
3/2	L-T index	l	18.6									
5/4	Index of cross-sec.	r	78.6			71.0		64.5	67.9	75.2		
		l	78.6	63.9			74.1	64.5	67.9	84.0		
5a/4a	Index of cross-sec.	r						69.0				
		l	81.5							83.3		

表 8 入め御拝領墓下肢骨の主要計測値

		(mm)															
		男性								女性							
<i>Femur</i>		6号	13号	15号	19号	21号	22号	1号	2号	3号	7号	13号	19号	21号	22号		
1	Max. length	r	404					352			369		383				
		l						372			363		377				
2	Physiological length	r	401					351			365		379				
		l						370			359		371				
6	Sagit. diam. of mid-shaft	r	23	28	29		28	23	25		22	24.5	24.5		24		
		l	24	28	29			22	26		22		24	23	24		
7	Transv. diam. of mid-shaft	r	26	27	26		26	25	25		24	24	24		26		
		l	26	27	27			26	25		23		24	21.5	26		
8	Circumf. of mid-shaft	r	77	86	86		87	73	77		70	75	77		78		
		l	79	86	89			75	77		70		76	73	78		
9	Subtr. transv. diam. of shaft	r	30	30	29			29	28		28	28	28.6		29		
		l	32	32	30		34	29	30.5		28	28	30	28			
10	Subtr. sagit. diam. of shaft	r	22	25	24			20	21		19	21	24		23		
		l	22	24.5	25		25	21	21.5		19	22	24.5	19			
13	Upper width	r	80							76			84				
		l				84	87		79	75			83				
21	Bi-epicondylar width	r	71				78				63		71		69		
		l									63		70		72		
8/2	L-T index	r	19.2					20.8			19.2		20.3				
		l						20.3			19.5		20.5				
6/7	Pilasteric index	r	88.5	103.7	111.5		107.7	93.9	100.0		93.6	102.1	102.1		92.3		
		l	92.3	103.7	107.4			86.3	104.0		97.8		100.0	107.0	92.3		
10/9	Platymeric index	r	73.3	83.3	82.8			70.2	75.0		66.1	75.0	83.9		77.6		
		l	68.8	76.6	83.3		73.5	72.4	70.5		67.9	78.6	81.7	67.9			
6+7/1	Robusticity index	r	12.1					13.5			12.3		12.7				
		l						12.8			12.3		12.7				
<i>Tibia</i>																	
1	Total length	r											312				
		l						297			299		309				
1a	Max. length	r											316				
		l			313			303			304		314				
3	Width of upper epiphysis	r			64		69										
		l									58						
6	Width of lower epiphysis	r	47		47	52							45				
		l	46		50		47.5	41			43		45				
7	Sagit. diam. of lower epiph.	r	33		33	36							34				
		l	36		35		35				29		33				
8	Max. diam. of mid-shaft	r	26				28.5	24	26				26	24	26		
		l	26		26			25	24		25		25		27		
8a	Max. diam. of nut. foram.	r	31				33.5	28	29				30	26	32		
		l	31		32			29	32		29		30.5		29		
9	Transv. diam. of mid-shaft	r	19				19.5	18	21				19	19	21		
		l	19		21			17	20		18		18.5		19		
9a	Transv. diam. at nut. foram.	r	21				22.5	20	21.5				19.5	19.5	23		
		l	21		23			19	21		20		19.5		23		
10	Circumf. of mid-shaft	r	71				78	68	72				71	67	76		
		l	71		73			68	70		67		70		78		
10a	Circumf. at nut. foram.	r	84				88	75	78				76	69	85		
		l	84		86			77	82		75		80		84		
10b	Min. circumf. of shaft	r	69		70		72	60	66				65	62			
		l	68		70			63	68		62		65		70		
9/8	Index of cross-sec.	r	74.5				68.4	75.0	80.8				73.1	79.2	78.8		
		l	73.1		78.8			69.4	83.3		73.5		74.0		71.7		
9a/8a	Cnemic index	r	67.7				67.2	71.4	74.1				65.0	75.0	70.3		
		l	67.7		71.9			65.5	65.6		69.0		63.9		79.3		
10b/1	L-T index	r											20.8				
		l						21.2			20.7		21.0				
<i>Fibula</i>																	
1	Max. length	l	320								293						
2	Max. diam. of mid-shaft	r			16				17		13		13.2				
		l	13		14	15			15		14		12.5				
3	Min. diam. of mid-shaft	r			13				11		8.5		8.7				
		l	11		11	9.5			10.5		9		8.5				
4	Circumf. of mid-shaft	r			45				45		35		35				
		l	40		41	39			41		36		34				
4a	Upp. min. circumf. of shaft	r							34		28		27				
		l	31			38			32		29		28				
3/2	Index of cross-sec	r			80.6				64.7		65.4		65.9				
		l	80.8		78.6	65.5			70.0		66.7		68.0				
4a/1	L-T index	l	9.7								9.9						

表9 入め御拝領墓人骨の推定身長

(cm)			
男	性	女	性
6号	157.3	1号	145.2
19号	153.0	2号	145.3
		7号	143.5
		19号	146.2
		21号	138.7
平 均	155.2	平 均	143.8

表10 入め御拝領墓人骨の歯冠計測値

(mm)										
	2号♀	3号♀	4号?	4号♀	5号?	6号♂	7号♀	10号♀	11号?	21号♂
<i>Maxilla</i>										
<i>MD-diameter</i>										
I 1		8.6	9.4		8.6				8.6	9
I 2			8.3	6.7				7.1	7.9	7.9
C	8.2		8.3	7.5	8		8	7.4	8	8.5
P 1		7.2	7.5	7	7		7.4	6.9	7.6	7
P 2		6.8	7		6.7		6.4	6.4	6.9	6.6
M 1		10.4	10	10	10.6		11.1	10.6	9.7	10.2
M 2		9.5	9.1	7.4	9.4	9.9	9		8.9	
<i>BL-diameter</i>										
P 1		9.5	9.8	8.8	9.5		9.5	9.5	9.6	9.4
P 2		9.3	9.2		9.2		8.3	9	9.6	9
M 1		11.5	11.5	11	10.7		11.6	10.9	11.4	12
M 2		11.8	11.4	10	10.5	11.9	10.4		11.6	
<i>Mandible</i>										
<i>MD-diameter</i>										
I 1		5.4	5.7		5.3				5.6	6
I 2	4.8	6	7	5.3	5.9	5.8			5.9	6.2
C	7.1	7.1	7.3	6.7	6.5	7.6	7.1		6.9	7.2
P 1		7	7.6	6.7	7.5		7.3	7	7.6	
P 2	7.4	7	7		7.2	6.4	6.8	7.5	7.3	
M 1		11.5	11.1		11.4		11.8	11.2	11.2	11.2
M 2			10.9	9.5	11		10.1	11.4	10.9	10.9
<i>BL-diameter</i>										
P 1		7.3	8.1	6.8	8		7.8	7.6	8.1	
P 2		8.1	7.7			8.3	8	8	8.7	
M 1		10.6	10.6		10.5		11.3	10.6	10.7	11
M 2			10.2	9.4	10.2		10.2	10.4	10.2	10.4

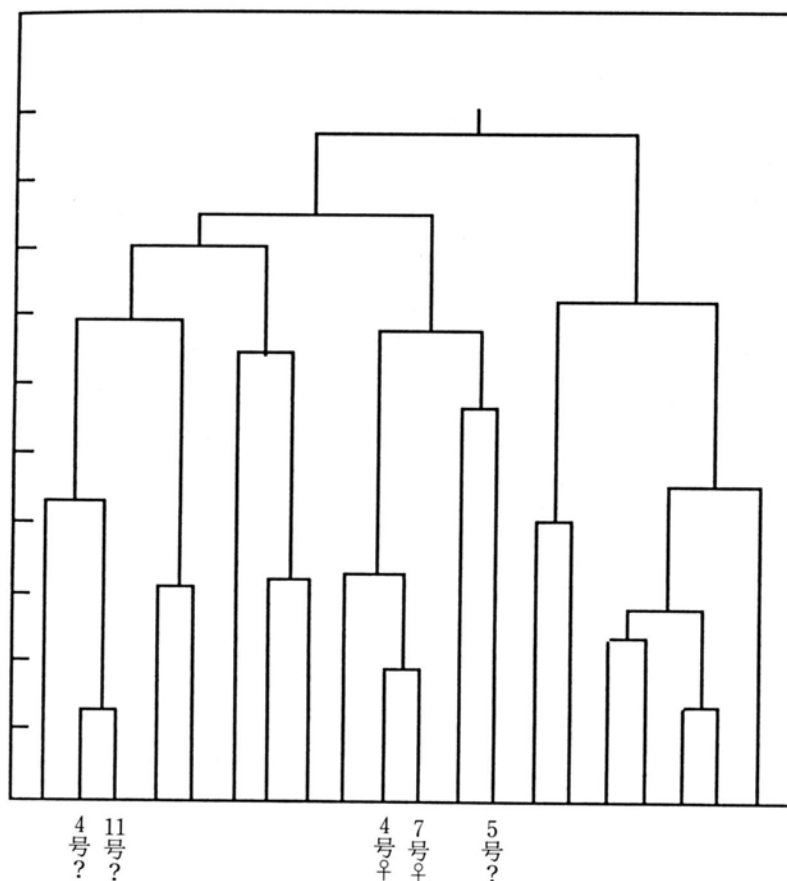
表11 歯冠計測値を基にした入れ御拝領墓被葬者のQ－相関係数

UCP1P2M1 LP1P2M1M2					
5号?	4号?	7号♀	10号♀	11号?	
5号?	1.00				
4号?	0.44	1.00			
7号♀	0.17	0.15	1.00		
10号♀	0.37	-0.38	-0.09	1.00	
11号?	0.29	0.79	-0.19	-0.30	1.00

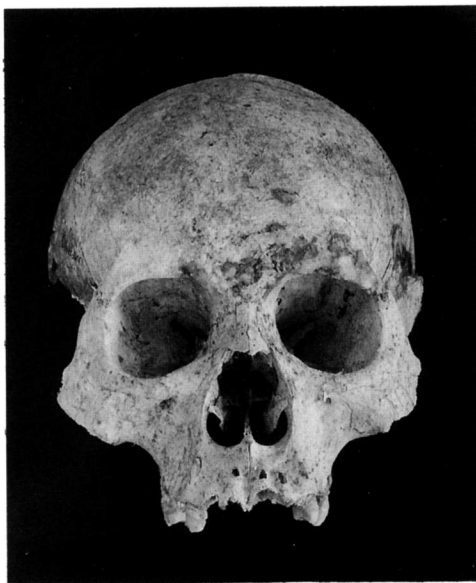
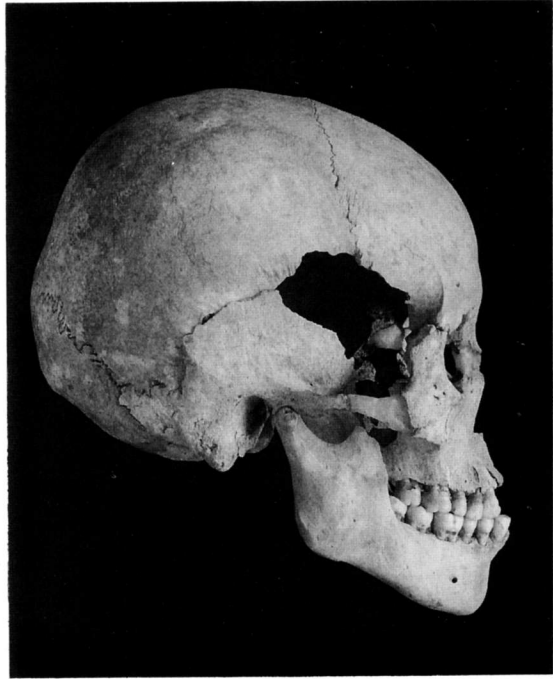
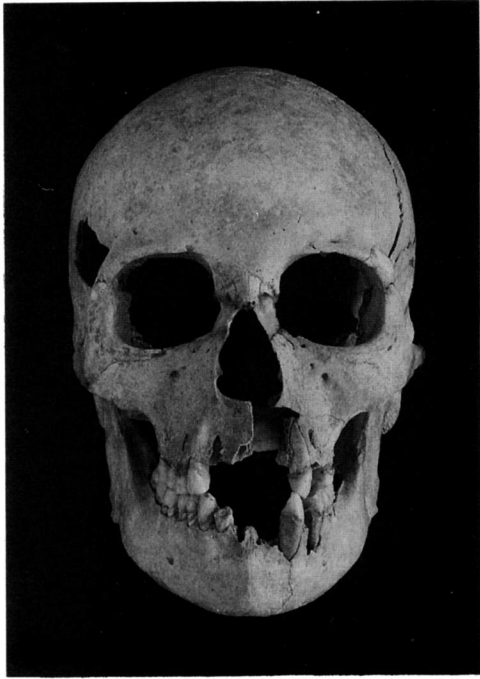
UCP1M1M2 LCP1M2					
4号♀	4号?	5号?	7号♀	11号?	
4号♀	1.00				
4号?	0.65	1.00			
5号?	0.16	0.36	1.00		
7号♀	0.81	0.49	0.47	1.00	
11号?	0.49	0.87	0.22	0.23	1.00

UCP1P2M1 LM1M2						
5号?	4号?	7号♀	10号♀	11号?	21号♂	
5号?	1.00					
4号?	0.29	1.00				
7号♀	0.12	-0.01	1.00			
10号♀	0.45	-0.42	-0.04	1.00		
11号?	0.02	0.79	-0.34	-0.51	1.00	
21号?	0.02	0.43	0.29	-0.46	0.05	1.00

UCP1P2M1 LP1P2M1						
3号♀	4号?	5号?	7号♀	10号♀	11号?	
3号♀	1.00					
4号?	0.15	1.00				
5号?	0.13	0.32	1.00			
7号♀	0.25	-0.02	0.13	1.00		
10号♀	0.30	-0.23	0.58	0.18	1.00	
11号?	0.03	0.80	0.21	-0.39	-0.21	1.00



第12図 歯冠計測値（Q－相関係数）からみた入れ御拝領墓被葬者の関係（郡平均法）



第13図 上段・中段：7号厨子甕人骨（女性） 下段：19号厨子甕人骨（男性）

第3節 民俗学からみた伊祖の入れ御拝領墓

玉 木 順 彦
(北谷町公文書館)

1. 墓の形態と造営年代について

(1) 墓の型式

「伊祖の入れ御拝領墓」の型式は小丘を掘り抜いて墓室とし、平葺の屋根をつけた平葺墓である。墓庭は岩盤を四角形に掘りくぼめたままの状態、石垣や隅石なども岩盤を利用した造りとなっている。墓の門は西向きであるが、南側石垣に意図的に石を積み上げた部分があり、そこは門の位置に相当することから造営時の門は西向きであったのが何らかの理由で北側に門を移したものとみられる。その大きな理由は墓の向いている方向にヒーザン（火山）があることによる。墓はヒーザンに向けて造るものではないといわれ、やむなく造営しなければならない時はヒンブンを建てたり、門は右側に造るものとされる。北谷町上勢頭（基地内）に類似例がある。（詳細は本章第1節の「墓の構造」または宮里信勇「伊祖の入れ御拝領墓調査概要」『浦添市立図書館紀要』No.6を参照）

また、本墓の直線的な面の方角が真北から東側に7～8度の角度に振れていることが調査によって確認された。このことは本墓の造営に際して羅盤・唐尺が使用されたことを物語っており、風水師の関与を示唆するものである。

墓室の中段棚の下中央部からブタの下顎骨が墓室奥に埋められているのが発見された。類例としては、石川市の伊波仲門門中墓があって墓口付近の2か所に外に向けて下顎骨が埋められていたという。これは墓大工が墓落成式の前夜に墓室で行う儀礼で、「墓を使用する人が多く出ないように」（死者が出ないように）との意を込めた墓大工だけに伝わる儀礼であるが、近年この儀礼は途絶えている。

(2) 墓の造営年代

前述の宮里報告では、本墓を1822（道光2）年に“新築”したとみている。確かに現存する墓は宮里報告のように1822年頃に“造営”したものであろう。ただし、宮里報告でも指摘している1761（乾隆26）年の銘書をもつ厨子甕や、他に1814（嘉慶19年）・1819（嘉慶24）年の紀年が入っている厨子甕の存在からは、本墓が“新築”ではなく“改築”である可能性をも示唆しているものと思われる。つまり、以前の墓を浦添按司の乳母をしていた呉勢が亡くなった時に浦添御殿から費用を拝領して改築したとも考えられるのである。1822年以前の本墓に関する史料が確認できないので、“新築”か“改築”ということは今後の課題である。

(3) 墓の広さ

本墓が造営された近世期には、墓の敷地の広さに制限があった。1809（嘉慶14）年に通達された「田地奉行規模帳」に、

墓所之儀可成程先祖墓相用新敷仕立不申候而不叶節は、山林竿迺より敷場見立、本地方へ致相談申出候はば、奉行見分之上諸士は拾二間四角、町田舎百姓六間四角、針図仕付御印紙を以て作調させ候事

附町田舎百姓墓所亀之甲迄餅打、其外之飾亦囲袖石垣無に相用させ候事

とあり、百姓は6間四角(1間=6尺=1.82m)の広さに制限されていた。ところで、「伊祖の入め御拝領墓」は最長約10m・最短約5mの変形台形状であり、その制限内である。如何に拝領墓とはいえ、きちんと規制の範疇内で造営されていることが知れよう。

2. 銘書にみられる民俗事象

(1) 洗骨日

民俗学関係の論文や報告書の洗骨の部分には、大抵「七夕(旧7月7日)に洗骨を行う」と記されている。ここでは、民俗調査で得られる「七夕洗骨」がはたして実態を反映しているのかを「伊祖の入め御拝領墓」の銘書からみていきたい。確認された厨子甕(22基)のなかで銘書のある厨子甕は16基、うち洗骨年月日が記されている厨子甕が10基ある。以下が銘書に記された洗骨年月日である。

- ①大正元年旧七月五日洗骨
- ②旧 四十□洗骨日
- ③嘉慶十九年甲戌五月廿八洗骨
- ④嘉慶貳拾四年己卯七月七日洗骨
- ⑤道光貳年壬午九月十四日洗骨
- ⑥道光貳年壬午九月十四日洗骨
- ⑦□□拾年□二月十二日洗骨
- ⑧咸豐壹年子五月□□洗骨／咸豐拾二年壬戌八月三日洗骨
- ⑨乾隆貳拾六年辛巳七月七日洗骨
- ⑩光緒元年乙亥七月六日骨洗

「七夕洗骨」を実践しているのは、11例中わずかに2例にすぎず「七夕」に近い日を加えたとしても4例だけなのである。このように民間伝承と実態は必ずしも一致するとは言えないのである。ただし、「七夕洗骨」を実践している2例は事例中でもっとも古い時代に属しており、古い時代に実践されていた可能性はあり得るだろう。

つまり、「伊祖の入め御拝領墓」の厨子甕の銘書に記された洗骨年月日は、古い時代に「七夕洗骨」が実践されていたことを暗示しながらも、総体としては「七夕洗骨」に固執していないことを提示しているといえよう。

(2) 夫婦合葬

「夫婦は死んだら一つの厨子甕に納める」という諺があるが、本墓においては以下の4例が確認できた。この事例でもって「夫婦合葬」を普遍化するものではないが、少なくとも「夫婦合葬」が百姓クラスまで浸透していたことを示していることは事実である。ただし、銘書の記載はないものの厨子甕に入っている人骨の分析を加味すると2例追加できる可能性がある。

- | | |
|------------|---------------------|
| ①三良銘苅／同妻兩人 | ③親富祖筑登之／親富祖筑登之妻 |
| ②かまど銘苅／同人妻 | ④田之はら之かめ／田ノはら之かめ妻吳勢 |

第4節 浦添家について

田 名 真 之

(那覇市文化局歴史資料室)

平成6年6月、伊祖のマンション建設現場にある墓の調査が行われた。平葺型の立派な墓である。墓内には20数個の厨子甕が安置されていたが、そのなかの一つの厨子甕の銘書に「道光2年壬午9月14日洗骨仕置申候浦添按司御乳母呉勢」^(墓)「基の儀者／浦添御殿／従入め御拝領」とあった。つまり、この墓は、浦添御殿から「入め」^{いり}(経費)を拝領して建てられたもので、拝領の理由は、被葬者の呉勢が浦添按司の乳母であったから、となる。

では、入めを与えた浦添御殿とはどのような家系で、呉勢が仕えた浦添按司とは誰なのだろうか。答えを先に記すと浦添御殿とは尚穆王の二子の尚図浦添王子朝央を始祖とする浦添按司家であり、呉勢の仕えた按司とは、二代目の浦添按司朝英のことだと考えられる。

本稿は、その浦添按司家と人々について、概略紹介するのが主目的であるが、その前に、浦添間切の総地頭たる按司地頭及び親方地頭について、さらに歴代の浦添の総地頭家について概説することから始めたい。

1. 按司地頭と親方地頭

王府時代、各間切には間切行政の最高責任者として総地頭が置かれていた。古琉球期での総地頭は、王子や按司など王とゆかりの人々が任じられていた。浦添間切の総地頭であれば、浦添王子や浦添按司と称した。また間切を構成する各村にも地頭が置かれていた。近世期に入ると、これら村の地頭は総地頭に対し協地頭とも称された。

以上は、王族や士身分のものが任じられたが、百姓でも地頭となるものがいた。オエカ人と呼ばれる地方の上級役人層で、なかには士と同様、村の地頭となるものがおり、彼らは夫地頭と称された。間切に4～5人置かれた夫地頭の一人が地頭代となり、総地頭にかわって間切行政の最高責任者となったのである。

さて、元来一人であったはずの総地頭は、近世期、17世紀中頃、2人制へと変更になったようで、新たな総地頭が登場してくる。親方地頭である。従来の王子や按司の総地頭は、按司地頭と称され、親方クラスの親方地頭と併せて両総地頭と称されるようになった。

17世紀後半～18世紀前半にかけて、中央の行政機構が整備されるとともに、地方の行政機構も整備されていったが、それは一つには、親方ら王府の中枢を担う官僚を中央の行政に専念させ、間切行政への直接の関与を弱めるものとなり、一方で間切の行政は、王府の地方支配担当部署（田地方、高所、仕上世座など）と間切番所が担当することとなった。間切番所は、地頭代を頂点として地方役人によって運営されていったのである。

こうして、両総地頭、協地頭を問わず、首里・那覇の地頭層は間切との関係を弱めていき、領地としての意味が大きなものとなっていった。

しかし、間切が収入（作得）を得るだけの存在になったのではなく、地頭代の推挙、検者の設置の際など、一定の行政的関わりは持続したし、御殿奉公を通して将来の地方役人層の幹部を育て、仕明地をも持つなど、様々な関係をもっていた。本稿の入め御拝領墓と関わる浦添御殿もそうした按司地頭家で

あったが、それでも浦添間切から乳母を求め、自らの墓も浦添に築いていたのは、^{あつかい}暖間切だからこそその関係からであつたらう。

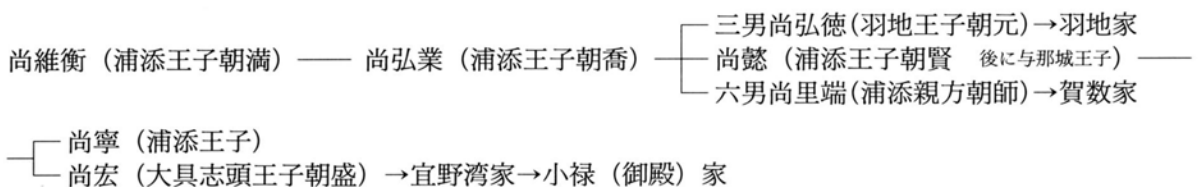
2. 浦添間切の総地頭

浦添間切の総地頭家は、按司地頭家にしても、入め御拝領墓と関わる浦添御殿以前にいくつかの系統がある。親方地頭家も同様にいくつかの系統がある。按司家、親方家ともに、領地替え（転封）や格下げ、召し上げなどにより変遷を遂げてきたからである。このことは、浦添間切に限ったことではなく、どの間切でも大概同様である。近世日本の大名やその家臣団の所領が、ほぼ一貫して安堵（保証）されていたのと較べるときわめて不安定にみえるが、功績や代数などにより地頭地（領地）の繰替えや新たな授与、召し上げを行い、知行の増減をなすシステムは、限られた領地を功ある上級家臣団にいか分配するかというなかから生み出された、近世沖縄の地頭制の特質の一つであるといえる。

さて、ここでまずは按司地頭家の系統からみていくことにしよう。最初に確認される浦添間切の按司地頭家は、尚真王の長子尚維衡・浦添王子朝満の系統である。尚維衡は、尚真の長子でありながら王家の内紛から王位に登ることができなかったと伝えられている。尚真が築造した玉陵の前に建つ碑文（たまおとんの碑のもん）には、尚真はじめその子供らの名が記され、これらの人々及びその子孫のみが葬られる資格があると、被葬者を規定しているが、長子たる浦添王子（尚維衡）の名は見えず、同人は領地浦添の「ヨウドレ」に葬られた。ただし後に王位についた異母弟の尚清によって玉陵に移されている。

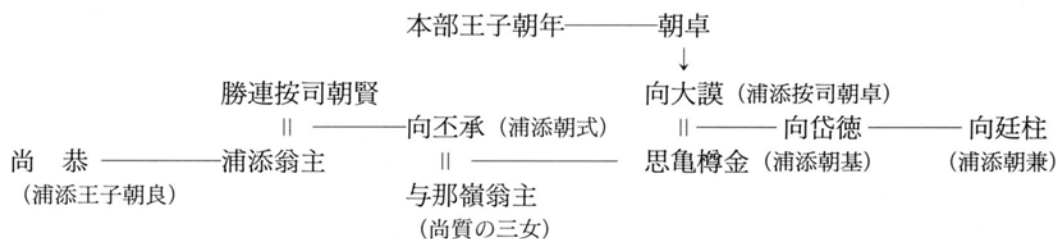
この尚維衡を初代とする浦添御殿家は、2代目尚弘業（浦添王子朝喬）、3代目尚懿（浦添王子朝賢）と続き、4代目が尚寧である。尚寧は後の万暦17年王位に登ったため、同家は尚寧の弟尚宏（朝盛）が嗣いだ、すでに具志頭間切の総地頭となって大具志頭王子を称し、浦添間切総地頭からははずれていた。同家は初代浦添王子朝満から4代尚寧が王位に登るまで浦添総地頭家だったことになる。正徳年間から万暦17年まで、年数にして約70年ほどであろう。その後数度の転封で具志頭一宜野湾、最後は小禄の総地頭となって廃藩を迎えた。

この系統は、二代目尚弘業から羽地朝秀を出した羽地御殿や島津侵入時の三司官浦添朝師を出すなど、多くの人物を輩出しており、一族の広がりに向家随一とみられている。



この後をうけて浦添の按司地頭になったのは、尚豊王の長子尚恭（浦添王子朝良、1612～31）の家系である。尚恭は子のなかった尚寧の世子となりゆくゆくは王位に登るはずであった。ところが、尚寧の没した万暦48年（1620）は数え年9歳だったため、国相を務めていた父尚豊が推されて天啓元年に王位についていた。それでも尚恭は世子であり、次期国王が約束されていたが、崇禎4年（1631）父に先立って20歳で没してしまった。尚恭没後、領地の浦添間切はわずか5歳の一人娘の思乙金に与えられた。思乙金は浦添翁主（また浦添按司加那志）と称し、勝連按司朝賢に嫁いだが、息子朝式を生んだ11日後に没した。18歳であった。母の死後1年、数え2歳の朝式は、母の跡目となって浦添間切総地頭となった。朝式（向不承）は尚質王の三女与那嶺翁主を室に迎えたが、同人とは女子二人をもうけただけで、三人

の男子は別腹であった。朝式は康熙26年(1687)4月、45歳の時、親戚に罪を得て粟国島に流された(23年後に赦免—68歳)。この時、室の与那嶺翁主らは、後に自らの娘の二女思亀樽金の婿となる本部王子朝年の子朝卓(13歳)を朝式の跡目に迎え、三代目をつがせた(向大謨)。浦添の総地頭となったのである。四代目は浦添按司朝基(向岱徳)、雍正6年(1728)父朝卓が致仕(隠居)したのをうけて総地頭に任じた。5代目は浦添按司朝兼(向廷柱)。乾隆4年(1739)に父を嗣いで総地頭職に任じたが、乾隆36年に高嶺間切の総地頭職に転じ、廃藩に至る。同系統の浦添総地頭任職は、尚恭から朝兼まで6人、万暦48年(1620)～乾隆36年(1771)の150年余に及んだ。



浦添翁主の後をうけて総地頭となったのが、尚穆王の三子尚図浦添王子朝央を祖とする家系である。乾隆36年から廃藩時まで100年余、4代続いた。同家の人々については後述する。

次に親方の総地頭についてみることにしよう。

古琉球期における浦添親方に、尚元代に三司官に任じた馬氏の初代馬良詮・大浦添親方良憲がいる。総地頭任職は尚清代の嘉靖年間のこととあり、1540～50年代となる。次に、同じく尚元代に三司官に任じた和氏の初代和為美・浦添親方景明がいる。隆慶年間とあるので、1570年前後となるが、具体的に不明である。ついで、尚弘業浦添王子朝喬の六子、三世の向里瑞浦添親方朝師の系統となる。朝師は島津侵入時の三司官で、謝名親方鄭廻とともに捕虜として鹿児島に連行された人物である。詳細は不明だが、1560年の生まれで、16世紀末には浦添間切総地頭、さらに三司官に任じたと推測される。後を嗣いだのは四世の向顧蹕浦添親方朝利で尚豊代の三司官である。『沖縄姓氏家系大辞典』によると、朝利は朝師の六男であり、子がなかったのでその後は弟の八男朝守が嗣いだという。朝守の後、同系統がいつまで総地頭職に任じていたか不明である。後の賀数家である。康熙36年(1697)には馬氏の馬猷図浦添親方良意が登場する。総地頭職への就任年は不明だが、尚益～尚敬代の三司官で、雍正6年(1728)に致仕している。同人は名護親方良意とも記されていることから、致仕する以前に名護間切へ転封となったかと考えられる。名護の前任総地頭は馬氏本家の7世良直で、雍正4年に久米仲里間切へ転封となっており、良意の名護総地頭任職は雍正4年と推測される。同系統は後の宮平家である。雍正4～10年(1726～32)の間に、浦添間切総地頭に任じた人物に阿氏の十世阿含章浦添親雲上守明がいる。浦添間切総地頭任職は同人だけで、11世からは前川家となっている。ついで、乾隆元年～15年(1736～50)の間に浦添親方朝夷の名が見えているが、向姓のどの系統か不明である。その次に登場するのが、尚穆王の三司毛文和浦添親方安減である。乾隆16年(1751)には古波津親方を称しており、浦添総地頭への任職はその後である。同人は乾隆24年に没しているが、その後長く同系統が浦添総地頭職に任じたようである。この間浦添王子(朝央、朝憲)の登場により、同名を憚って「譜久村」姓を称していたと考えられる。王国末期、最後の浦添総地頭職となったのが、向居謙浦添親方朝昭である。玉川御殿系統の14世で、尚泰代の三司官を務め、琉球処分王府側の当路者として任にあたった人物である。総地頭任職年は不明ながら、

同治八年（1869）時点では任職していた。

以上、浦添の親方地頭家は、少なくとも八つの系統で担われてきたことがわかる。浦添間切は総地頭家の変化の大きかった間切といえる。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| ① 馬氏浦添親方良憲（尚清～1566） | →小禄家 |
| ② 和氏浦添親方景明（尚元代） | →古謝家 |
| ③ 向氏浦添親方朝師（1560－1620） | —— 浦添親方朝利 —— 浦添親方朝守 →賀数家 |
| ④ 馬氏浦添親方良意（1661－1726～） | →宮平家 |
| ⑤ 阿氏浦添親雲上守明（1704－1732） | →前川家 |
| ⑥ 向氏浦添親方朝夷（～1736－1750～） | →？ |
| ⑦ 毛氏浦添親方安減（1697－1759） | →？ |
| ⑧ 向氏浦添親方朝昭（～1869－1879～） | →浦添家 |

3. 浦添御殿（按司家）

先述の二系統の浦添按司家をうけて、三番目の浦添御殿として登場するのが、尚図浦添王子朝央を祖とする浦添家である。同系統は、次の系統図にみるように、四代目の時廃藩を迎えている。以下一人一人について概略していく。

一世 浦添王子朝央 —— 二世 浦添按司朝英 —— 三世 浦添王子朝憲 —— 四世 浦添按司朝忠

① 尚図浦添王子朝央

尚穆王の第二子で、乾隆27年（1762）11月6日に生まれた。乳母は新里あんしられといった。10歳で浦添間切総地頭となる。12歳の時知行高300石を拝領した。15歳で家を拝領、普請をおえた翌年、御殿（浦添御殿）を立てて独立。同年元服（片髪結い、烏帽子親は伊江親方、養父は譜久山親雲上）。翌年17歳で真壁按司の娘と縁組。18歳で式を挙げた。翌年嫡子思亀金が生まれると、次々と1792年までに6男2女が生まれた。1782年6月、21歳の時、前年に將軍家治の世子に豊千代（家斉）が決定したことを祝する書翰を江戸に転達してもらうための使者となって鹿児島に赴いている。翌年4月に帰国した後、帰路の安全祈願成就のためであろう、開聞町の枚聞神社に「妙靈普濟」の扁額を献納している。1794年10月、33歳で読谷山王子朝慶の後をうけて摂政に就任したが、1797年、36歳で病没した。

② 浦添按司朝英

朝央の子。1781年生というから次男の真蒲戸（童名）であろう。同人の記録は、現在のところ『中山世譜』『同附卷』や他家家譜にも全く見当たらず、不詳というしかない。

ただ池宮正治『近世沖縄の肖像』（ひるぎ社、1982年）の「浦添朝憲」の項に多少触れられている。それによると、没年は1808年でわずか28歳で卒したことになる。唐名や経歴は不明。『琉球古今和歌集』に一首が収録されているとして、次の和歌が掲げられている。

鶴に鴛鴦の おもひ羽つけて

あさ夕つゝまれて くらしぼしやの

③ 尚元魯浦添王子朝憲

朝英の子。1805年生まれで1854年没。1835年摂政に任じ、按司から王子位に昇った。1842年には、将

軍家慶の即位（1837年）を祝うための慶賀正使として江戸に上っている。副使は座喜味親方盛普である。その行程は、6月に薩州着、8月出発、11月江戸着、翌年3月薩州帰着、4月帰国となっている。この時一行のなかに久米村の名筆・鄭元偉や漢詩をよくした魏学賢がいた。朝憲は帰国の2ヵ月後、薩摩藩主斉興の正四位へ昇位を賀する使者として薩摩に上っている。

漢詩、和歌、琉歌をたしなみ、歌人としても知られる朝憲は、『沖縄集』や『琉球大歌集』に多くの作品を残している。また江戸上りから帰国した天保14年（1843）には大阪の浪華天満宮に「徳馨」の扁額を献納している。同扁額は天満宮より贈られ、現在沖縄県立博物館ロビーに掲げられているが、縦86.9cm、横190cmの大きなものである。また県指定文化財の『浦添家本伊勢物語』は浦添御殿（朝憲）の旧蔵に係るとされている。

朝憲は1852年摂政を辞し、2年後の1854年に没した。享年50歳。近世を代表する文化人であった。

④ 向有徳浦添按司朝忠

1848年の生まれ。朝憲には男子がなかったらしく、向氏奥武親方朝昇の六男朝忠が跡を嗣いで四代目となった（『沖縄姓氏家系大辞典』による）。1879年32歳の時、琉球処分が断行されたが、朝忠は按司位にありながら急進的であったようで、明治16年（1883）9月、沢岨親方安本ら43人とともに脱清、清国に渡っている。清国では福州にあって脱清人の重鎮として琉球復旧に奔走。83年12月には幸地朝常、沢岨らと連名で嘆願書を提出、その後87年にも嘆願書を出している。

朝忠がその後どうなったのか、どこでいつ没したのかなどは不明である。

おわりに

浦添家の人々について概略してきたが、同家家譜がないため不明な点が多いのは残念である。空白を埋めていく作業は、今後とも資料を発掘渉猟していくほかはない。

ところで、肝心の「浦添按司（御殿）乳母呉勢」についてだが、呉勢の年齢、歴代の当主の年齢、また王子ではなく按司を称していることから考えて、二代目朝英の乳母とするのが妥当だろう。入め墓拝領は呉勢の死に際してのことで、朝英没後となるが、呉勢は乳母時代から老齢で没するまで浦添御殿に仕えていた可能性が高いのであり、その死後、御殿（朝憲の代だが）から父朝英の乳母として、墓仕立てのための入めが与えられた、と考えられよう。これに類した例は、王府時代それほど稀ではなかったと推測されるのだが、具体例として確認できるケースは多くはなく、貴重な記録といえる。

第V章 まとめ

浦添御殿と呉勢

「伊祖の入れ御拝領墓」は、1822年頃に、浦添間切・伊祖村の百姓・田ノはあら家が、浦添間切の総地頭である浦添御殿から入れ（経費）を拝領して造営したいいわゆる御拝領墓である。墓室に納められた17号厨子甕の銘書には、「道光貳年壬午九月十四日洗骨仕置申候／浦添按司御乳母呉勢／嘉慶貳拾五年／辰十一月九日死／寿七拾壹／但かま戸銘苅女子／基（墓）之儀者浦添御殿從入れ御拝領」と記されている。つまり、呉勢（かま戸銘苅の女子）は、浦添按司の乳母として仕えていたが、嘉慶貳拾五年（1820）に71歳で死亡した。その洗骨が行われた道光貳年（1822）頃に、田ノはあら家が浦添御殿から墓の入れ（経費）を拝領して造営したのがこの墓であった。

墓造営の経費や墓地を王家や御殿家から拝領する御拝領墓の存在は伝承では知られていたが、このように文字によって明確に記された事例はきわめて少ない。そこで浦添市教育委員会ではこの墓の歴史的重要性を考慮して、「伊祖の入りめ御拝領墓」と名付けることにした。

それでは、呉勢が乳母として仕えた浦添按司とは誰であろうか。この伊祖村の女性と浦添御殿の関わりは、那覇市文化局歴史資料室の田名真之氏の報告（第IV章第4節）によると次のようであった。浦添御殿は、琉球国王・尚 穆の第二子 尚 図（浦添朝央）を祖として浦添間切総地頭を務めてきた浦添家である。その二代目浦添朝英の乳母が呉勢だったと考えられる。朝英は28歳で没したが、呉勢はその後も浦添家に奉公を続けたらしい。こうした呉勢と浦添御殿との深いつながりから、呉勢の死去にともない、浦添御殿は田ノはあら家に墓造営の費用を与えたと考えられる。

人骨からみた被葬者

ところでこの墓には、呉勢の厨子甕を含めて21基の蔵骨器が納められていた。そのうち15基の蔵骨器に被葬者の名前、親子関係、洗骨年などが墨書されている。この銘書については、本市立図書館沖縄学研究室の長間安彦氏・小野まさ子氏・栗国恭子氏・徳元剛氏、那覇市文化局歴史資料室の田名真之氏に解説してもらった。これらの銘書から、9人の被葬者についてその親族関係が明らかになった。呉勢とその父（かま戸銘苅）・母、呉勢の兄弟（かま戸銘苅嫡子三良銘苅）とその妻、そして彼らの子供たち（つまり呉勢の甥・姪）であった。また、呉勢の娘と思われる「あむしられ女子かめ」もあった。

しかし、銘書がない大半の被葬者については、全く手がかりがない。また銘書があっても他の被葬者との親族関係や年齢が不明なものが多い。そこで琉球大学医学部の土肥直美氏に、蔵骨器に納められた洗骨人骨の分析を依頼した。土肥氏の報告（第IV章第2節）によると、21基の厨子甕から30体分の人骨が検出された。そして人骨の分析から、銘書からは分からない被葬者の出産経験、病気、怪我などの経歴が明らかになり、無銘の被葬者の性別・年齢も判明した。また、歯冠計測値は、この墓の被葬者がかなり近い親族関係にあることを示しており、銘書が示す親族関係や年齢が人骨分析でも裏付けられた。

この墓の被葬者の系譜関係は、墓室に納められた蔵骨器の配置や厨子甕の型式からも分析できる。墓室は一番～三番の棚と左右の棚そして汁ヒラシに区分されているが、この墓の造営の功労者ともいえる呉勢は、墓室の最上段の一番棚の中央に安置され、その周りには呉勢の娘とみられる夭逝した女子かめ（No.16）・父母（No.15）・兄弟夫婦（No.18）の蔵骨器が配置されていた。そしてその子孫の蔵骨器が、順次下位の棚に置かれ、最後は最下段の汁ヒラシに置かれて墓は閉じられた。こうした蔵骨器の配置展開

は、厨子甕型式からも裏付けられる。上江洲均氏の厨子甕編年によるとボージャー厨子は17世紀後半～1780年代まで使用されているが、ボージャー厨子のほとんどが一番棚や一番左棚に配置されていた。そして、二番棚・三番棚・三番右棚や最下位の汁ヒラシでは、1基を除いて、すべて1770年代以後登場するマンガン掛け厨子甕やマンガン掛け庇付き厨子甕であった。

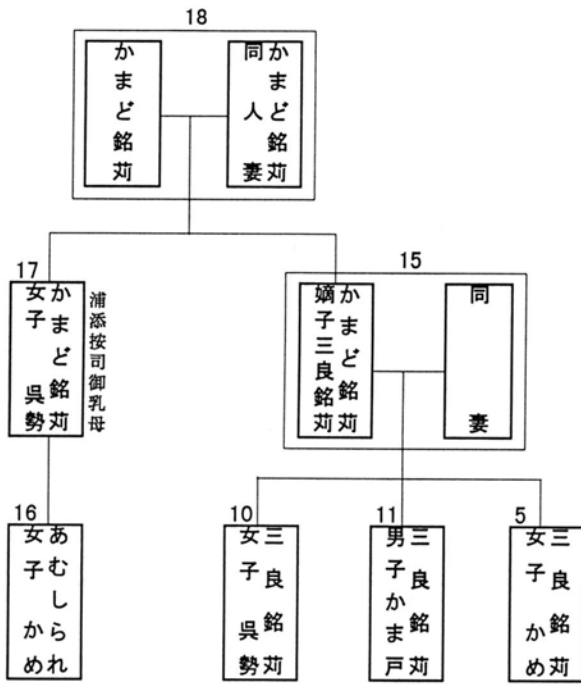
造墓と葬送の習俗

本墓については、造墓や葬送とかかわる習俗もいくつか明らかになった。まず墓室内二番棚の中央部から墓造成時に埋納したブタとみられる下顎骨が出土した。この出土位置は、発掘の地区割りのために設定した墓口中心を通る中軸線の真下にあたっていた。北谷町公文書館の玉木順彦氏の報告（第IV章第3節）によると、ブタ下顎骨の埋納は、墓大工が墓落成の前夜に墓室で行う儀礼である。また墓口はほぼ磁西に向いているが、墓の外門はほぼ磁北に向けて開けられていた。このことについて玉木氏は、外門を北に向けているのは、墓の西側にあるヒーザン（火山）をさける習俗と関係があるとみられること、墓口や外門の角度は羅盤を使用して設定したことを物語っており、風水師の関与を示唆すると指摘している。このほか玉木氏は、銘書の洗骨年月日から19世紀には必ずしも七夕洗骨は一般的ではなかったこと、夫婦合葬が百姓クラスまで浸透していたことや、御殿家からの御拝領墓といえども1809年に通達された「田地奉行規模帳」による造墓規制を遵守していることなどを指摘している。

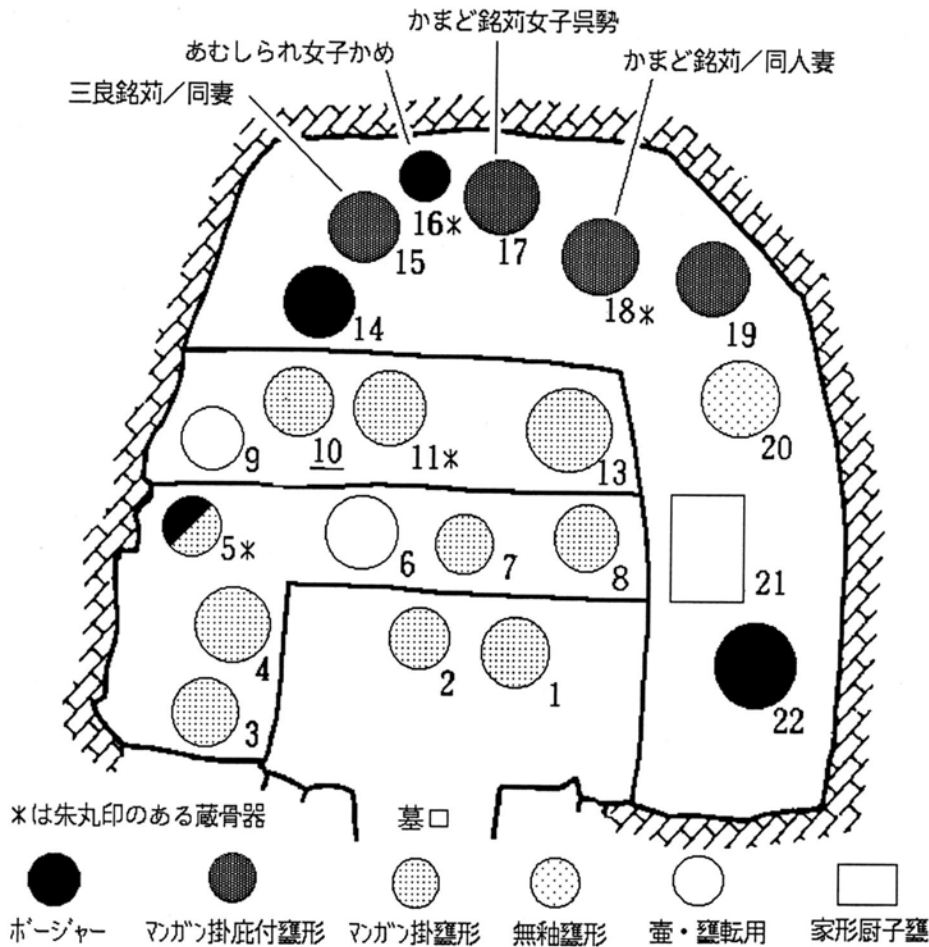
学際的調査の展望

さて、伊祖の入れ御拝領墓の調査では、厨子甕型式分析や銘書の調査に加えて、人骨調査や風水との関係という観点からの分析を試みた。これらの分析結果を相互チェックすることによって、近世琉球の百姓の系譜が明らかにできるだけでなく、被葬者一人一人のプロフィールまで浮かび上がらせることが可能になる。こうした学際的な近世墓の調査が、系図を持たず、また歴史の表舞台に登場することなかった百姓家族の実像を明らかにする方法として有効であることが見えてきた。本書では、事実関係を中心に報告したが、これらの学際的調査の総合的検討の詳細は次年度に報告する予定である。

第14図 銘書から推定した被葬者の関係 (数字は蔵骨器No.)



第15図 蔵骨器配置の模式図 (数字は蔵骨器No.)



写真図版



▲南西から（写真中央が伊祖の入れ御拝領墓）



▲東から

図版1 伊祖の入れ御拝領墓遠景

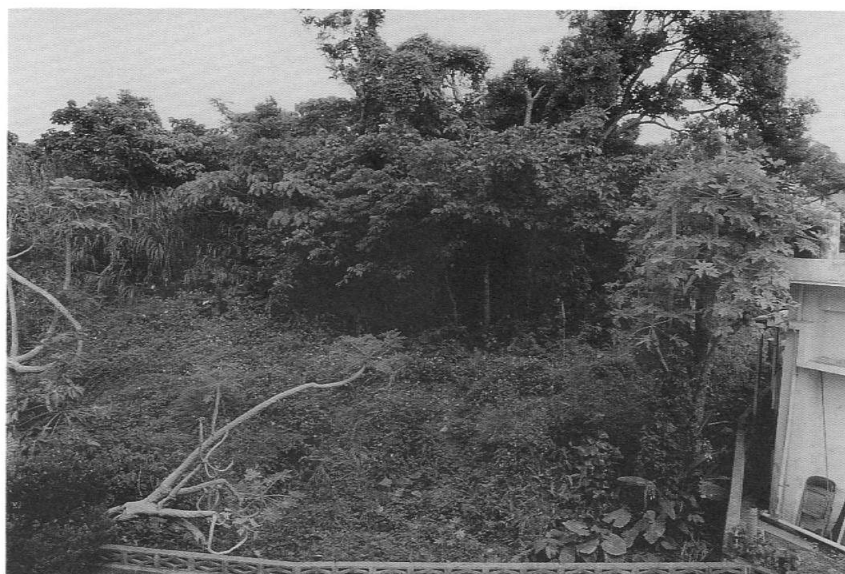


▲南西から



▲北西から（背景の丘陵は浦添グスク）

図版 2 伊祖の入れ御拝領墓近景



◀伐開前



◀伐開後



◀清掃後

図版3 発掘開始前の状況



▲平面



▲正面

図版 4 伊祖の入れ御拝領墓



▲墓庭南側石垣



▲墓庭北側石垣

図版 5 伊祖の入め御拝領墓



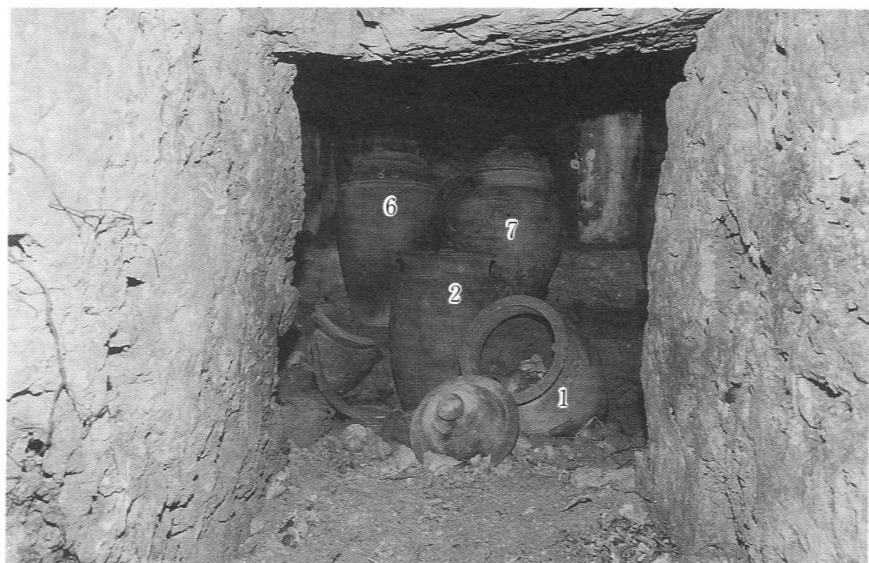
▲墓庭西側石垣



◀墓口の敷石



墓室内からみた墓口▶



◀墓口からみた汁ヒラシ



◀汁ヒラシ
(写真の左端は墓口)



◀墓室右 (三番棚)

図版 7 墓室内の状況 (数字は厨子甕No.)



◀墓室右（一番棚～二番棚）



◀墓室正面（一番棚）



◀墓室左（一番棚）

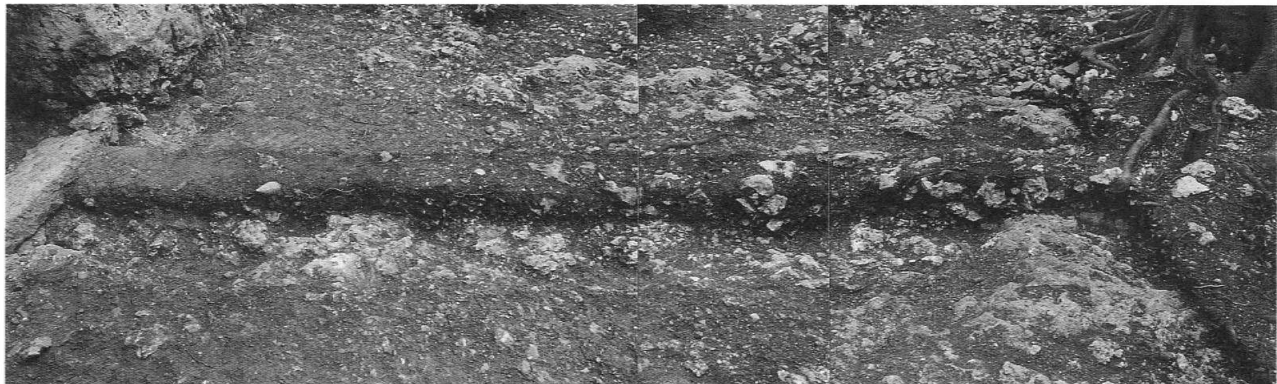
図版 8 墓室内の状況（数字は厨子甕No.）



▲屋根縦断面土層（写真の右が基庭側）



▲庇の裏込め（屋根上から）



▲基庭縦断面土層（写真の左端は基口）



▲基庭縦断面土層（写真の右端は西側石垣）



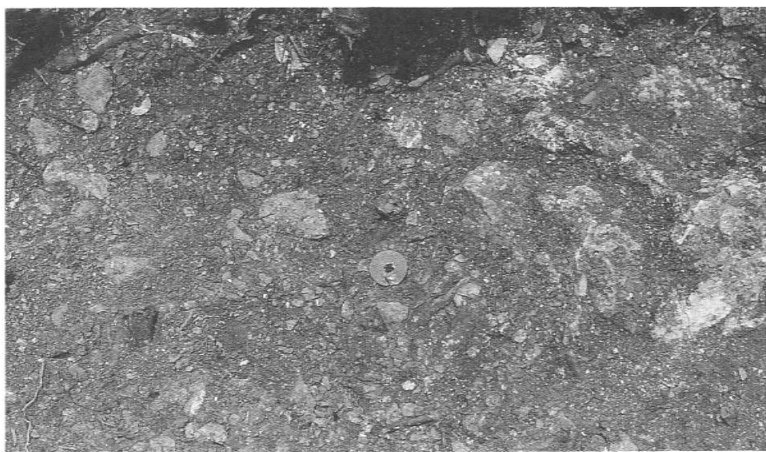
◀基庭西側石垣の縦断面（写真の左が基庭）



▲プタ下顎骨（墓室二番棚造成土中）



▲厨子甕（22号）蓋破片（墓庭南石垣上表土中）



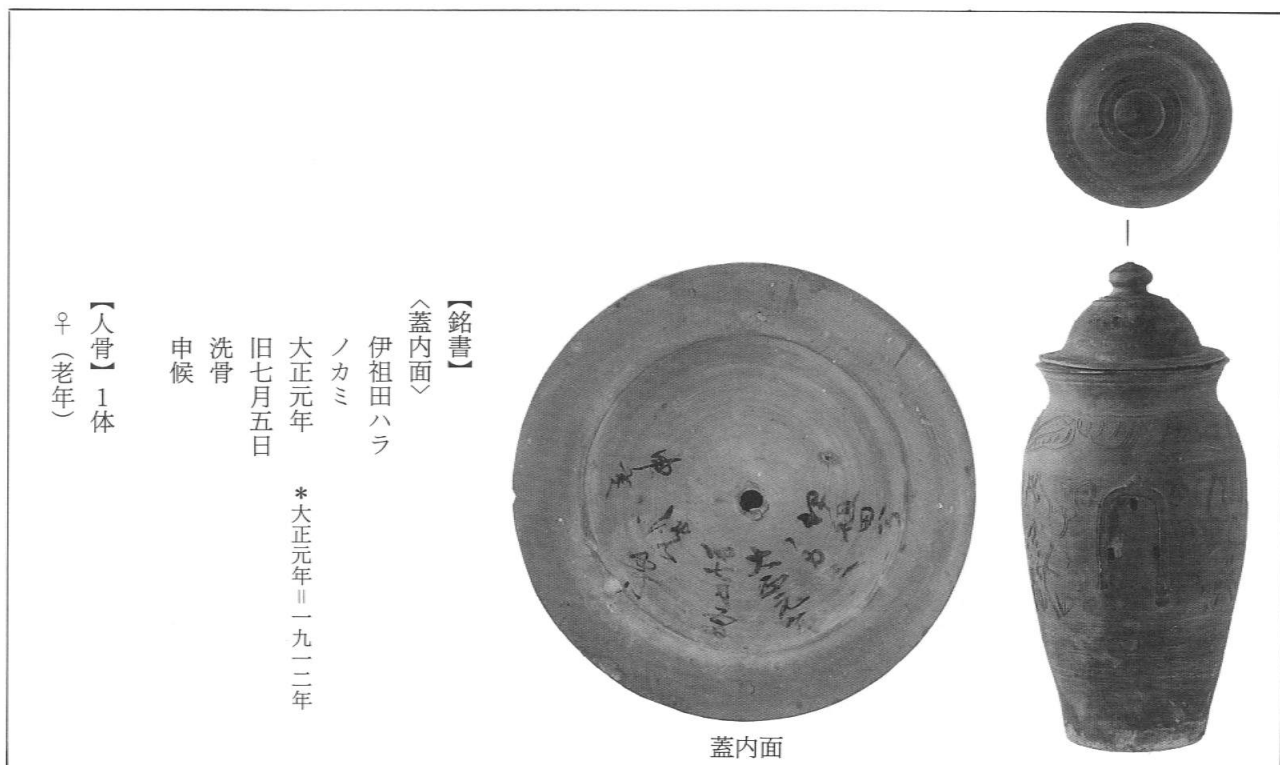
▲小杯およびシャコガイ（墓庭南東区表土中）

◀寛永通寶（墓庭北東区表土中）

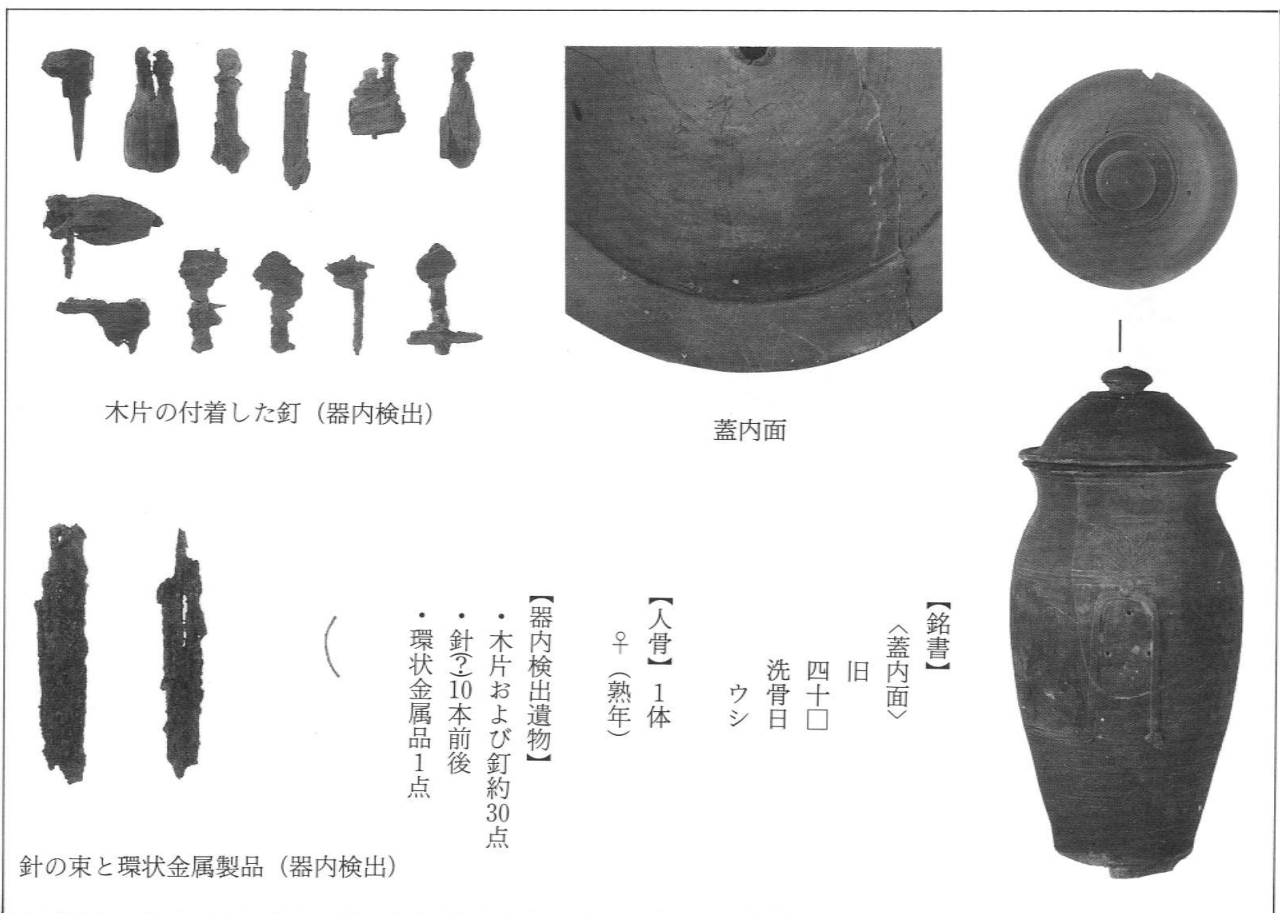
蔵骨器および出土遺物

銘書凡例

- ・文字の不明箇所は□や〔 〕で示し、文字を推測しうる場合は（……カ）と傍記した。また、別字の可能性も考えられるものには（……？）で示した。
- ・誤字とみられる文字は「…」で正した。
- ・朱印および朱書については（朱印）（朱書）とそれぞれ傍記した。



1号



2号

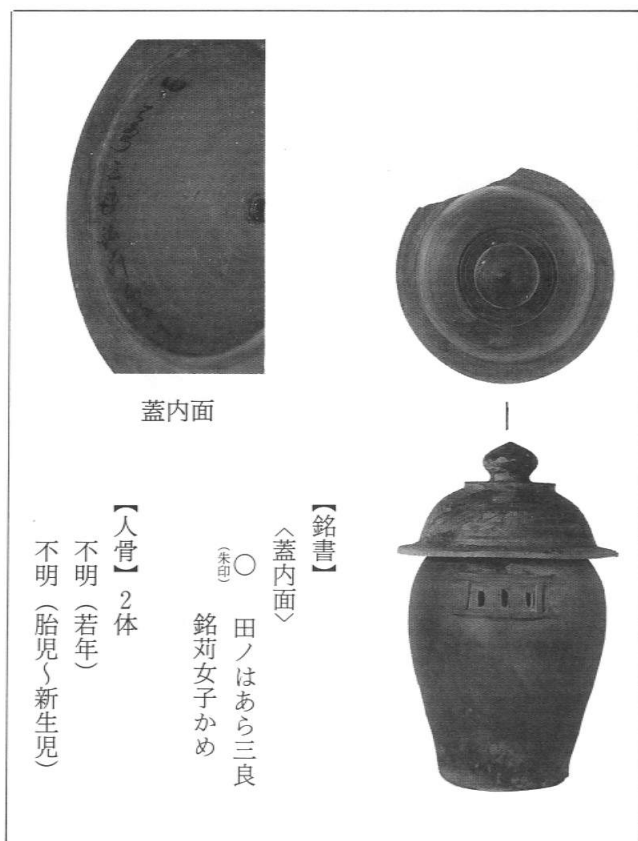
図版11 蔵骨器と銘書



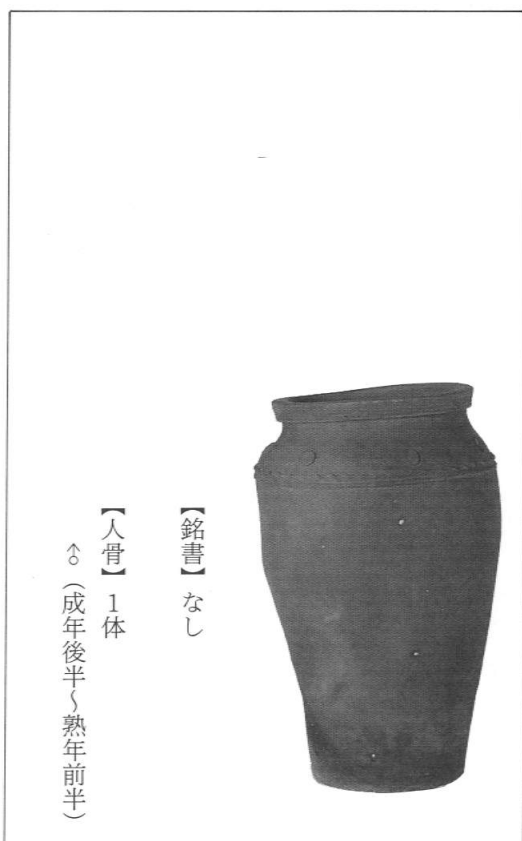
3号



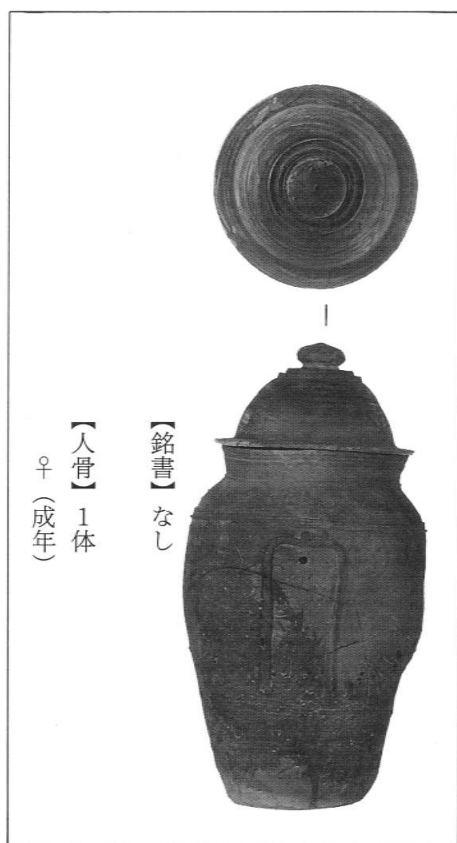
4号



5号



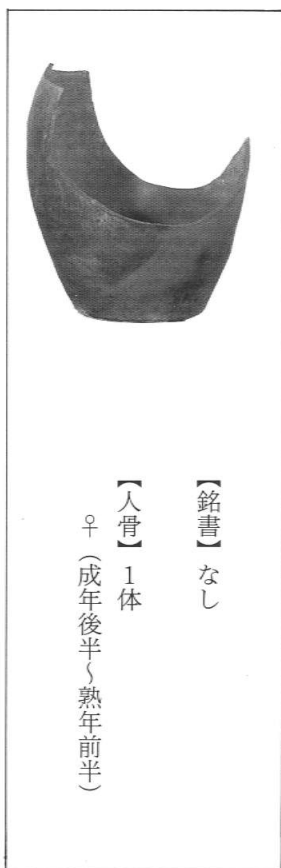
6号



7号



8号

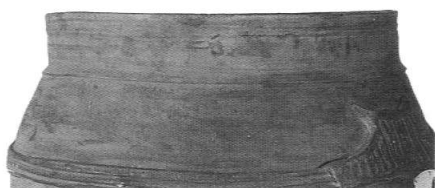


9号

図版13 蔵骨器と銘書



10号



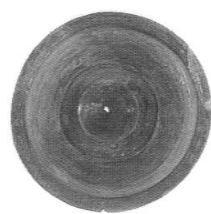
身（口縁外面）



蓋内面



朱印



【銘書】

〈蓋内面〉

○（朱印） 田ノはらん三良銘荳男かま戸

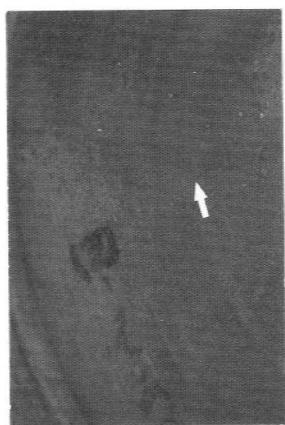
〈身口縁外面〉

三良（銘カ） 荳男（字カ） □（カカ） ま戸

【人骨】 1体

不明（若年）

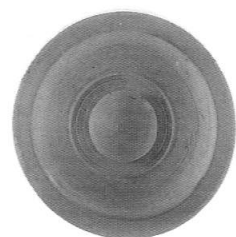
11号



朱印



蓋内面



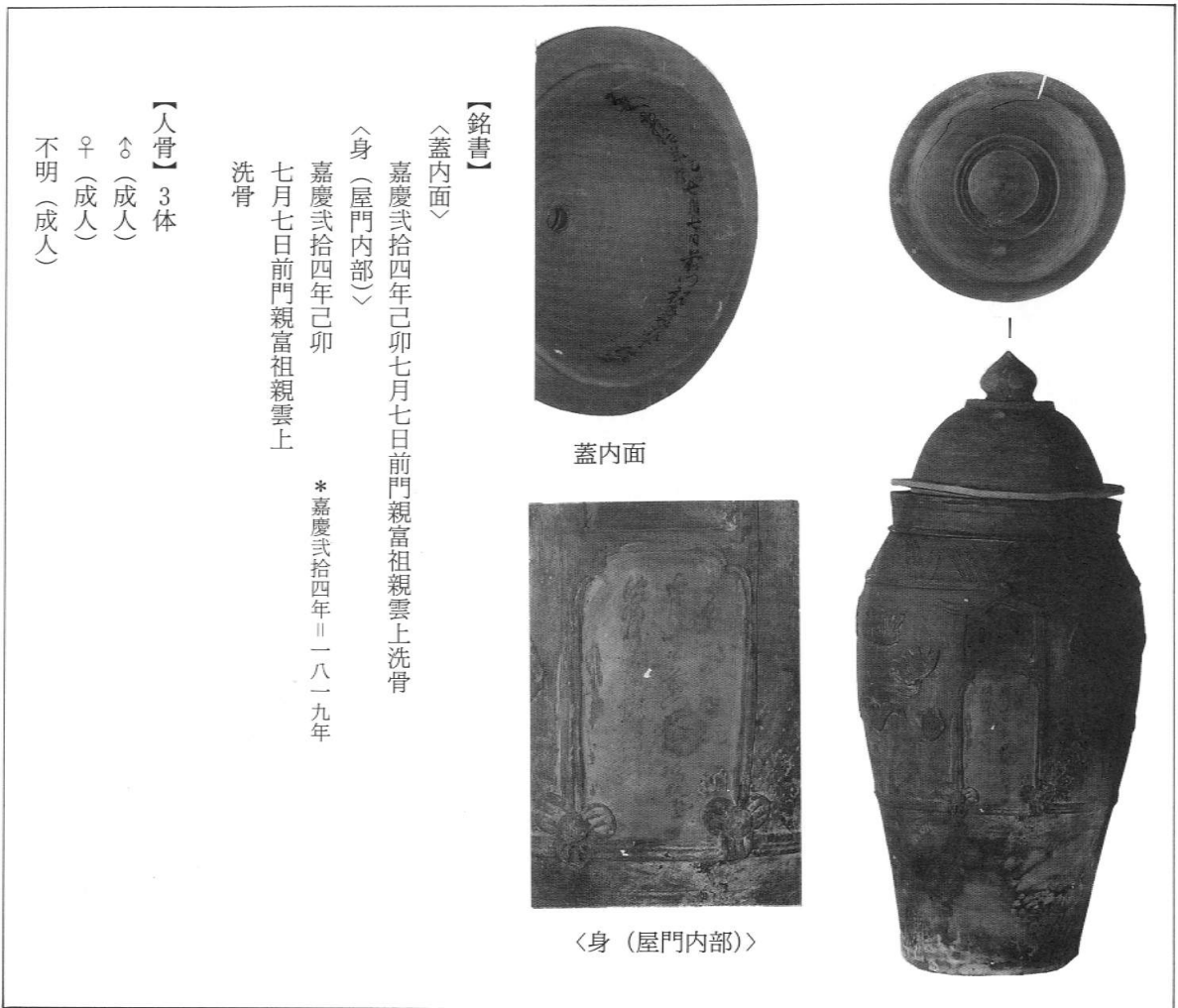
【銘書】 * 蓋のみ出土

〈蓋内面〉

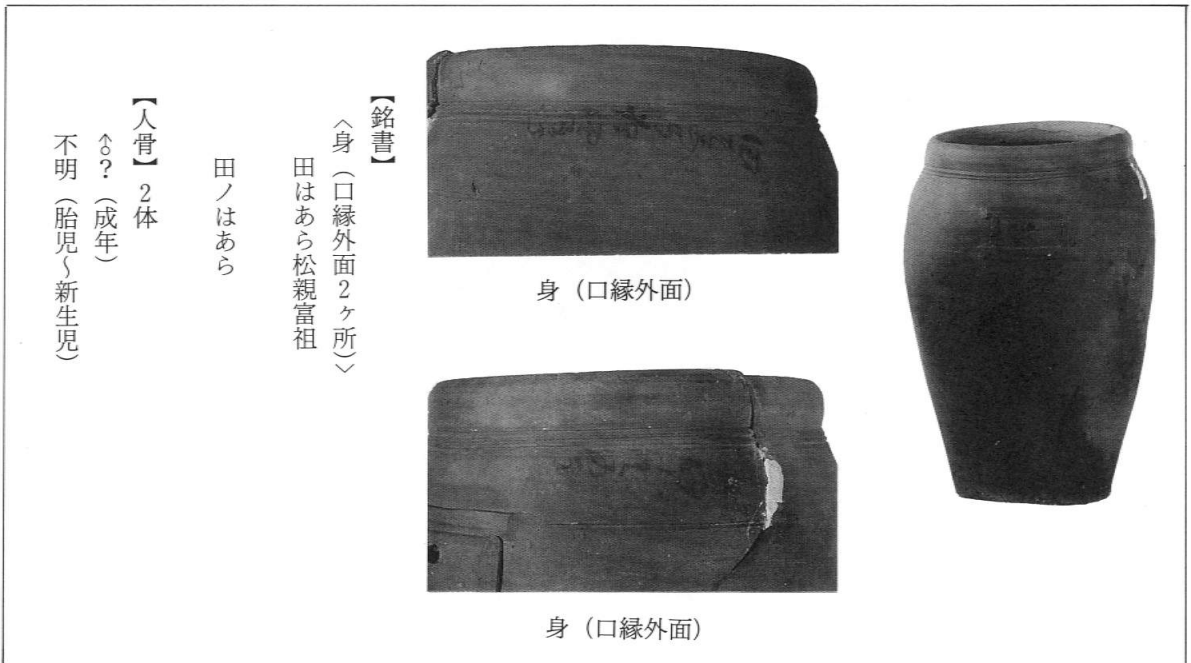
○（朱印） 田ノはあらノ松親富祖

12号

図版14 蔵骨器と銘書



13号



14号

図版15 蔵骨器と銘書



蓋内面



【銘書】

〈蓋内面〉

道光貳年壬午九月

十四日洗骨仕三良

銘

同妻兩人

但かま戸銘

嫡子

* 道光貳年一八三二年

【人骨】2体

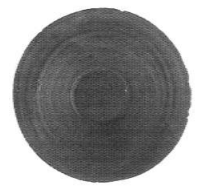
♂ (成人)

♀ (成人)

15号



蓋内面



【銘書】

〈蓋内面〉

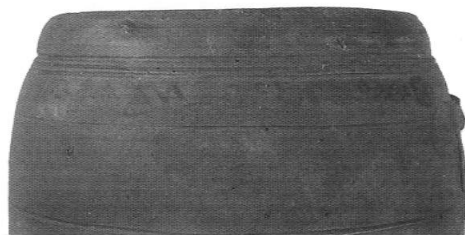
○ 田ノはあらあむしられ女子かめ

〈身(口縁外面)〉

田ノはあらあむしられ□□かめ

【人骨】1体

不明(幼児)



身(口縁外面)

16号

図版16 蔵骨器と銘書



蓋内面



身（胴部内面）



身（屋門内部）



【銘書】

〈蓋内面〉

道光貳年壬午九月十四日洗骨仕置申候
浦添按司御乳母吳勢

*道光貳年一八二二年

嘉慶貳拾五年

辰十一月九日死

寿七拾壹

但かま戸銘苅

女子

基之儀者

浦添御殿

従入め御拝領

〈身（屋門内部）〉

道光貳年壬午九月十四日

洗骨仕置申候事

（朱書）浦添御殿御 ☐ ☐ （乳母力）

（朱書）吳勢

〈身（胴部内面）〉

道光貳年壬午

九月十四日

洗骨

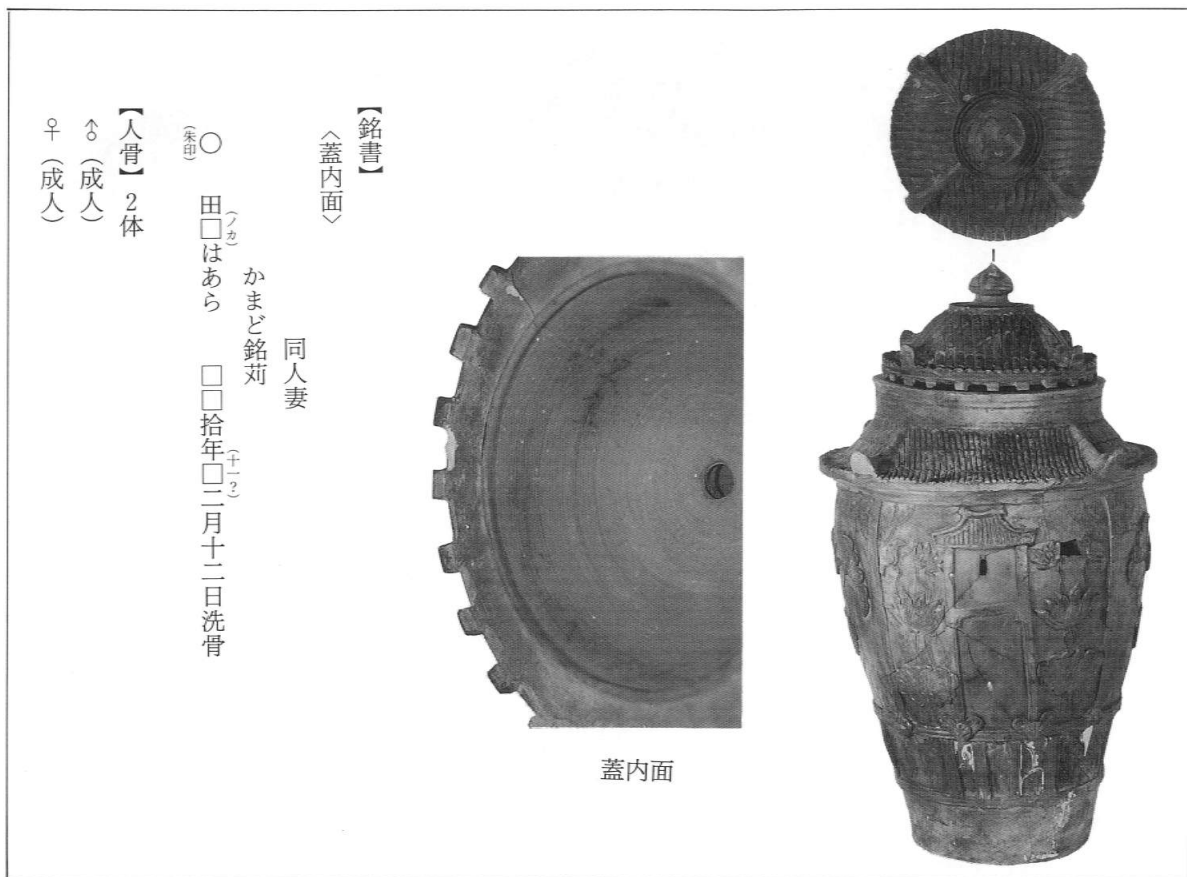
仕置候

（朱書）御 ☐ 母 （乳力）

（朱書）浦添按司

【人骨】 1 体

♀（老年）

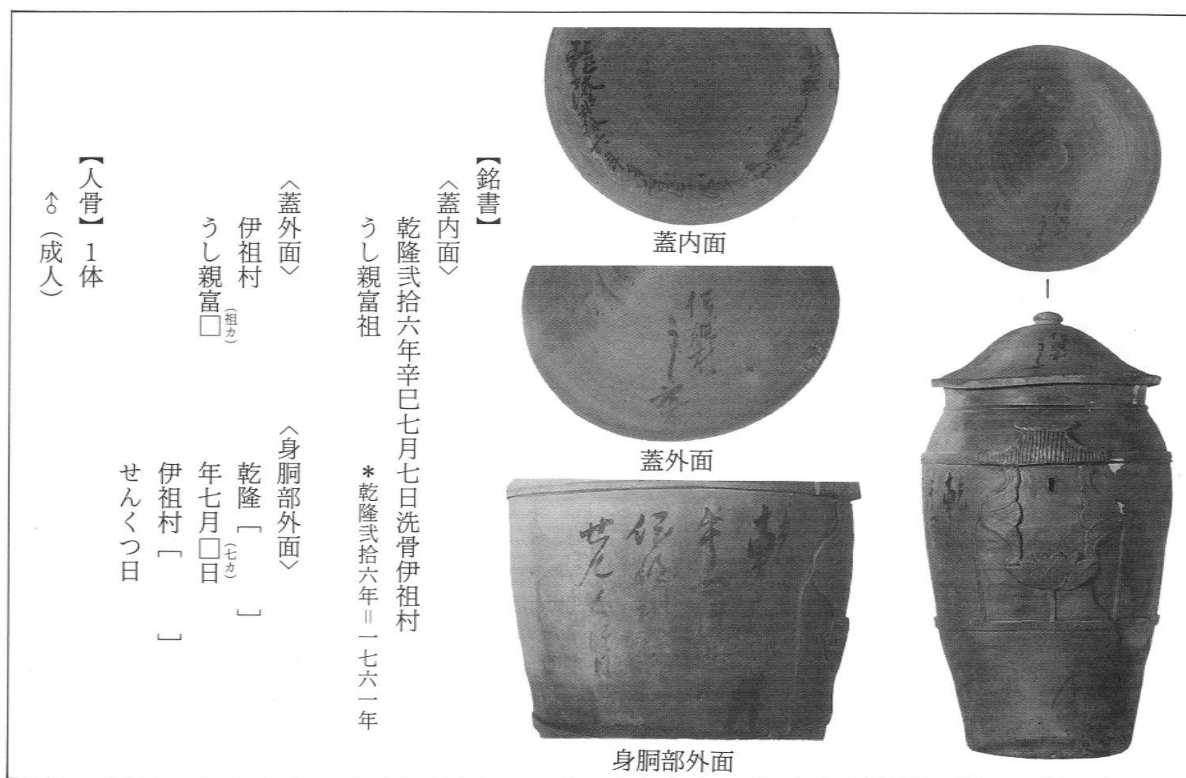


18号

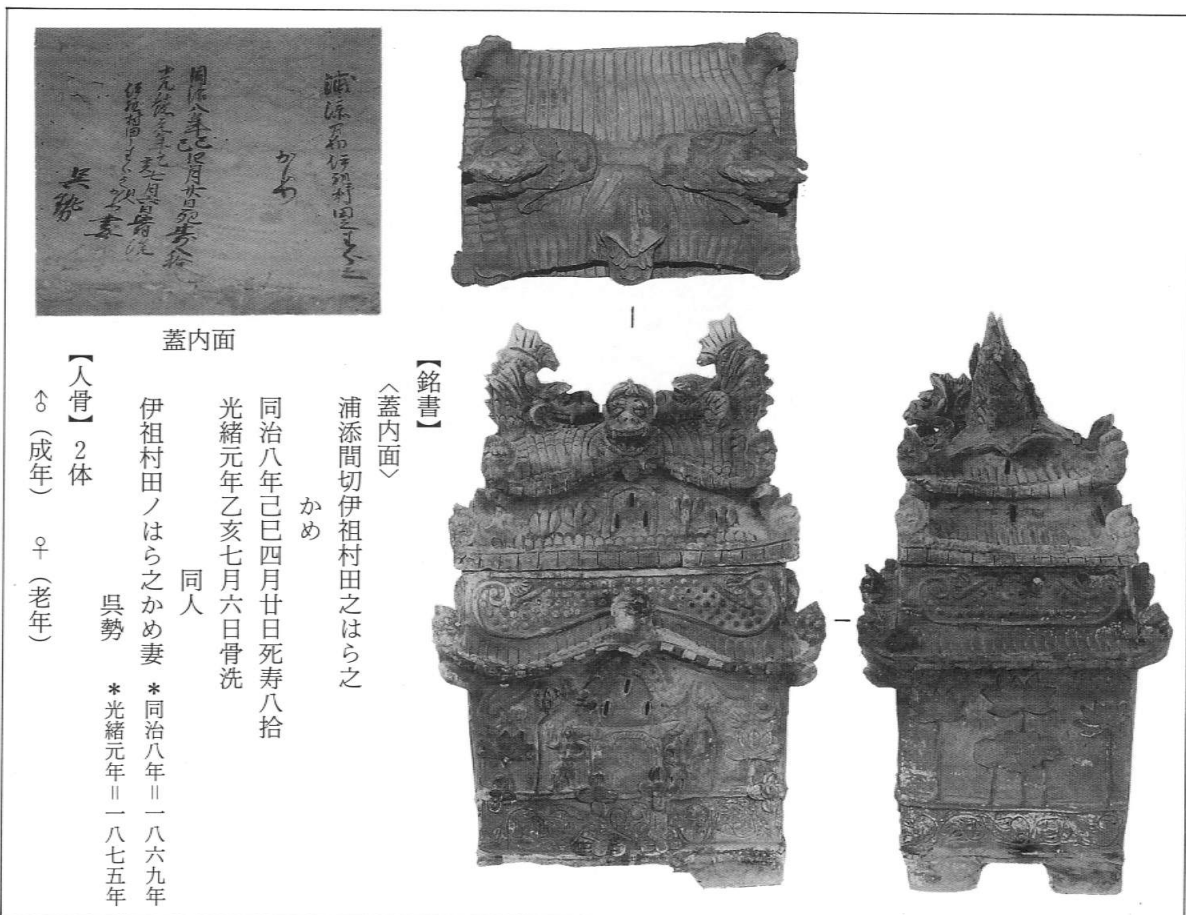


19号

図版18 蔵骨器と銘書



20号



21号

図版19 蔵骨器と銘書



枝サンゴ片（器内検出）

【器内検出遺物】
枝サンゴ片28点

【人骨】2体
♂（成年）
♀（成人）

【銘書】なし



22号



墓室内の状況

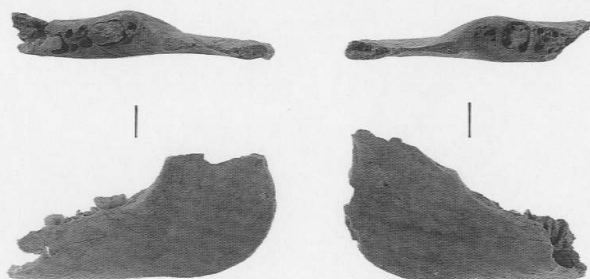
図版20 蔵骨器と銘書

〈墓庭出土〉



1 墓口蓋石

2 香炉



(左)

(右)

3 プタ下顎骨 (墓室内出土)

〈墓室内出土〉

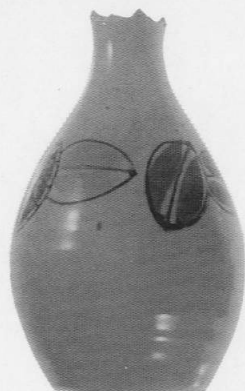


4



5

〈墓庭出土〉



6



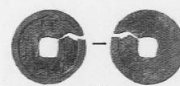
7



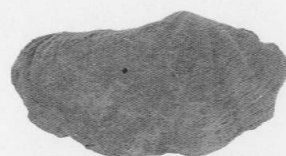
8



9



10



11

〈その他 (墓庭石垣上および墓周辺) 出土〉



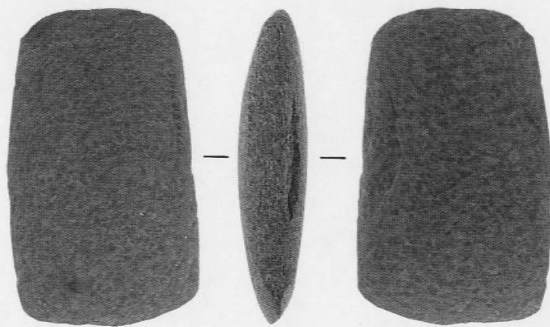
12



13



14



15

浦添市文化財調査報告書第24集

伊祖の入れ御拝領墓発掘調査報告書

－マンション建設に伴う近世墓の発掘調査－

発行日 平成 8 年 3 月29日

発行所 浦添市教育委員会

浦添市宮城 2 丁目 4 番 1 号

電話 098-877-4556

FAX 098-878-1487

印 刷 文進印刷株式会社